FOURTH
ENGLISH
GRAMMAR

第四英文法の話

初等英語叢書第十三編

特27
~~521~~997

初等英語叢書第十三篇

FOURTH

ENGLISH GRAMMAR

第四

英文法の話

『英語研究』記者編著

明治
43. 10. 14
内交

THE EIGOKENKYUSHA
TOKYO

初等英語叢書目次

第一篇　初等英作文の話
第二篇　初等英文法の話
第三篇　對譯四洋幽靈の話
第四篇　ろーま字の話
第五篇　第二英作文の話
第六篇　第二英文法の話
第七篇　アラディンのランプ
第八篇　ロビンソンクルーソー
第九篇　第三英作文の話
第十篇　第三英文法の話
第十一篇　後のロビンソン
第十二篇　イーソップの話
第十三篇　第四英文法の話
第十四篇　ギリシヤ神話
以上既刊
第十五篇　發音綴字の話
第十六篇　英文日記の話
第十七篇　第五英文法の話
以上本年中に發行　第十八篇以下續出

初等英語叢書の序

世間に英語英文に關する編著は幾らもある。併し眞の初學者用のものは尠い。たまにあつても餘りに簡單で餘りにお粗末で餘りに俗受け專門のやうである。眞に初學者の爲めを思ひ叮嚀親切に、平易明瞭に、而かも解し得らるゝ限り詳密に書いたものは、頓と見當らない。

雜誌『英語研究』は實にこの陷缺を充たさんが爲め發行するものである。此叢書を發行する趣旨も矢張同樣の點にある。幸に『英語研究』同樣の歡迎を受くることを得ば、啻に同人一同の光榮計りではない。

學校生徒諸君は『英語研究』と此叢書とを常に左右に置いて、學校で受けた智識の補ひをせられたい。獨學の士は『英語研究』と此叢書とを對照して獨修の困難を比較的輕減せられたい。

此叢書の記事に就きての質疑は永久に歡迎す

る。微力の能ふ限り讀者をして一點の疑問なからしめたいのは同人一同の希望でもあり抱負でもある。されば質疑の答解は成るべく詳にして『英語研究』誌上に掲載する覺悟である。

明治四十一年九月

『英語研究』編輯局

同人謹識

緒言

今年程小生の身に事の起つた年はない。吉事、凶事、多忙な事、樂みな事、それからそれと種々の事が起つて、爲めに殆ど落附いて叢書を書くべき餘裕を得られなかつた。そんな事で「第三英文法の話」發行以來、既に半年を經る今日、やつと本書を出す事になつた樣の次第、斯う遲れてはもう申譯の言葉もない、唯ひたすらに同情厚き讀者の宥恕を請ふのみである。

いつも文法の話と同時に出した作文の話の方は、今度は同時に出されなかつた。實は今後は成るべく毎月一二冊宛定期發刊したい考で、本月は本書と「ギリシヤ神話」の二冊、來月は「發音綴字の話」十一月は「第五英文法の話」「英文日記の手引」十二月に「第四英作文の話」と、斯んな順序に、「文法の話」と「發音綴字の話」だけは交互に必ず隔月一冊發行し、何れか其一方が完結の上で、更に「第四

英作文の話」以下を引續き出す事にして、餘り同じ書物の續篇が途切れぬ樣に、其方が讀者には却て便利であらうと考へたからである、尤も此豫定は成るべく勵行する考へ、イヤ小生も男である。避くべからざる故障の外は是非勵行せん事を誓ふのである。

本篇には冠詞の全部と、動詞の分類とを詳說してある。動詞の變化、活用其他は「第五英文法の話」に引續き說明する豫定である。

例により匆卒の間になつた原稿であるから、誤謬があらば切に御示敎を願ふ。

明治四十三年九月

秋冷漸く朝夕に感ずと思ひながら

編著者識

CONTENTS.

目次

		PAGE.
第一	ARTICLE の性質	1
I.	ARTICLE の定義	2
II.	ARTICLE の意味	5
	1. a と an との意味	5
	2. a と an との讀方	9
	3. the の意味と讀方	11
	4. Definite Article と Indefinite Article	12
第二	ARTICLE の用法	13
	1. Adjective との比較	13
	2. Noun との關係	14
	3. Article に代る語	16
	4. Article の位置	17
I.	INDEFINITE ARTICLE の用法	19
	1. 其名詞を generalize す	21
	2. 其名詞の whole class を表はす	23
	3. 其名詞に a certain の意味を附す	25
	4. 其名詞に one の意味を附す	27
	5. 其名詞に the same の意味を附す	28
	6. 其名詞に per の意味を附す	29

7—9. 名詞以外の語に附く特別用法…… 30
Indefinite Article の一覽表…… 32
II. DEFINITE ARTICLE の用法…… 33
1. 其名詞を particularize す…… 35
2. 其名詞の whole class を表はす…… 41
3. 或種の普通名詞に習慣上 the を附す…… 43
4. 或種の固有名詞に習慣上 the を附す…… 44
5. 或語に附して phrase となる…… 46
6. 普通名詞を無形的の意味になす…… 47
7. 固有名詞を普通名詞の意味になす…… 48
8. 前置詞 by の後に附して measurement を示す…… 49
複數の名詞に附したる the…… 49
9—13. 名詞以外の語に附したる the…… 51
Definite Article の一覽表…… 54
第三 ARTICLE の省略…… 56
1. 呼び掛けの名詞…… 57
2. 家族を指す名詞…… 58
3. 家族間の關係又は官職名を示す名詞…… 59
4. a kind of 等の次の名詞…… 62
5. school 等の名詞…… 63
6. 動詞句…… 69
7. 對句をなす名詞…… 72
8. 對句をなす形容詞…… 74
9. never, ever の次にある名詞…… 75

10. next と last…… 76
11. most…… 77
12. 尊稱等を示す名詞と固有名詞…… 78
13. 書物の標題と見出し…… 79
14. 「……といふ」意味を含む名詞…… 80
15. as に伴ふ名詞…… 80
16. 二個以上の名詞同一物を示す時…… 81
17. 二個以上の名詞異れる物を示す時…… 83
18. 二個以上の形容詞一つの名詞に附く時…… 84
19. 二個以上の形容詞異れる名詞に附く時…… 85
Article の省略の一覽表…… 86
第四 ARTICLE の位置…… 88
1—2. 通則の位置…… 88
3—9. 變則の位置…… 88
Article の位置の一覽表…… 92
第五 VERB の性質及び分類…… 92
I. VERB の定義…… 93
1. Action を示す Verb…… 97
2. Being を示す Verb…… 97
II. VERB の分類…… 99
1. Finite Verb と Verbals…… 99
2. Principal Verb と Auxiliary Verb…… 102
3. Transitive Verb と Intransitive Verb…… 105
A. Transitive Verb と Objects…… 108
B. Double Objects—Dative Verb…… 111

C. Complete Transitive Verb と Incomplete Transitive Verb—Factitive Verb..... 115
D. Reflexive Verb..... 117
E. Causative Verb..... 120
F. Intransitive Verb—Complete と Incomplete 123
G. Impersonal Verb..... 128
H. Prepositional Verb 129
I. Cognate Object 131
J. 兩者の轉用..... 134
a. Transitive より Intransitive に轉用... 135
b. Intransitive より Transitive に轉用... 137
Verb の分類の一覽表

第四

英文法の話

第一

Article の性質

Article（冠詞）は日本語にない Part of Speech（品詞）であるから、初學者には鳥渡解り惡い。尤も近頃出來る日本文典の中には冠詞といふものを載せて居るが、それは舊來「まくらことば」といつたもので、例へば「鳥が鳴く東の空」だの「久方の天」「くろがねの地」などいふ類の、或る名詞に冠する極つた語句であつて、英語の冠詞即ち Article といふものとは全然別の物である。

Article（冠詞）の事は「初等英文法の話」に Noun（名詞）を研究する時、相當に詳しく其事をも述べて置いたが、尤もそれ等は Noun（名詞）を主とし、それに伴ふ Article の用法を論じたのであるから、以下に順序を立てゝ論ずる項目とは或は重複する所もあらうが、彼の斷片

Ärtĭ-cle（あーティクル）冠詞。 Pärt ŏf Spēech（パートオヴスぴーチ）品詞。 Noun（なゥン）名詞。

的であつたに比較して、これは系統的で、其趣も從て大に違ふ所なくてはならぬと思ふ。併し以下を讀む際には是非ともあの Noun の篇をも參照して、彼是相對して研究せられたい事は勿論である。

I. Article の定義

Article (冠詞) の定義は既に「初等英文法の話」第九頁に次の如く示して置いた。

Definition (定義).——An Article is "a" "an" or "the," used to limit the application of a Noun.

〔冠詞とは名詞の適用を制限する爲めに用ゐらるゝ a an 又は the をいふ〕。

今此定義の示す所を分解して考へると、ざつとこれだけの事が解る。

第一. Article (冠詞) に屬する語は a と an と the との三語しかないこと。

英語一切を分類して Nine Parts of Speech (九品詞) とし、Article も其一種類となつて居るが、其種類に屬するものは僅かにこの三語に過ぎないのである。 Noun (名

Dĕf i-nĭ'tion (でフィにシァン) 定義。 ūsĕd (ゆーズド) 用ゐらるゝ。 lĭ-mĭt' (トゥーリみット) 制限する爲めに。 ăp-plĭ-cā'tion (アップリけィシァン) 適用、應用。

詞) などの樣に十萬も二十萬も語數のあるものも一つの品詞で、斯んなに三つしか語數のないものも一つの品詞といへば、餘りに其懸隔が甚しいから、自然分類法が不穩當とも考へられるが、併し歐羅巴の東から亞細亞の北に掛けて、東半球の殆ど五分の一近くも占めて居る露國も一つの獨立國であれば、狹い歐羅巴の中央、獨墺露などの中央に位置を占むるといひ條、小さな地圖などでは餘程眼の玉を光らさないと發見し得ぬ位の小國瑞西でも、同じく一の獨立國である。獨立國として其名簿に列する上に於ては廣い露西亞も狹い瑞西も、一向變りがない事などを考へたら、澤山語數のある名詞も僅か三語しかない冠詞も、同じく一つの品詞であるといつたつて、別段不思議でもなからう。

第二. Article (冠詞) は Noun (名詞) に附屬する語であること。

上の定義に冠詞は名詞の意味を制限する爲めに用ゐる語とあつた。されば冠詞は常に名詞に附屬するもので、名詞なくば從て冠詞の必要もなく、名詞のある所には必ず冠詞のあるが普通であるといふ事も推測し得られよう

つまり冠詞とは名詞といふ人間の冠る帽子の樣なもので、或る特別の事情なき限りは名詞は常に其頭にこの冠

詞を冠らねばならぬのてある。

第三. Article (冠詞) は Noun (名詞) 以外の語には附屬すべきものでないこと。

上の推測より更らに推測すれば斯うも考へ得らるゝ。即ち冠詞は名詞以外の品詞、例へば Pronoun (代名詞)だの Adjective (形容詞), Adverb (副詞) など、一切名詞以外の語には普通附屬しない、名詞以外の語には冠詞を伴ふに及ばないといふ事が原則となつて居る。

第四. Article (冠詞) は Adjective (形容詞)の一種と見ても差支ないこと。

何故といふに形容詞も冠詞と同じく名詞の意味を制限する役目をするものである。否、名詞の意味を制限するのは形容詞の役目の幾つもある内の一つである。從て冠詞は形容詞のする役目中の一種と同じ役目をするものといふ事が出來、冠詞を形容詞中の一種と見做す事も出來るのである。

文法家の中には、此見解を採り、冠詞といふ獨立の一品詞を認めず、形容詞中の一種にしてしまつて、品詞の數を都合八つとして居る人も澤山ある。斯んな分類など

Prō'noun (プろゥナゥン) 代名詞。 Ăd'jĕc-tive (あヂェクティヴ) 形容詞。 Ăd'vĕrb (あドヴァブ) 副詞。

は何うてもよい樣のものだが、念のため一言して置くのである。 Nesfield 氏や Swinton 氏の文法などは現に皆さうなつて居る。

以上ざつと定義より推測し得らるゝ Article (冠詞) の性質を研究し終つた。これより更らに此意味 (meaning) をしらべて見る事としよう。

II. Article の意味

Article (冠詞) の意味をしらべるといへば、即ちそれに屬する語、a と an と the との意味をしらべる事である。此三語の意味が解つたら、即ち Article の意味は解つたのであるといつて差支ないわけであるから。

1. a と an の意味

a と an とは同じ意味の語である。唯發音上の必要から斯う二つの語に分けられてあるだけで、其用法、其意味、少しも異る所はない、一つの規則の下に一つものと見て少しも差支ないのである。

a と an との意味は斯うてある。

日本語で「本を見せて頂戴」といつた所で、唯「本」といふのは或る書物と極つて居て、例へば前刻話しのあつ

Nĕs'field (れスフィルド) 人名。 Swin'ton (スゥィントン) 人名。 mēan'ing (みーニィング) 意味。

た書物とか、今君の見て居る其書物とかいつた風に、見せて貰ひたい書物に注文があるのか、またどれでもよい一冊見せて貰いたいといふのか、單にこれだけのでは解らない、前後の關係によつて推測するより外仕方がない。又日本語は單數と複數とに依つて語の形に變化がないから、今見せて貰ひたいといふ本は一冊なのか、または數冊なのかそれも前後の關係によらずば推測が出來ぬ。即ち上の

本を見せて頂戴といふ意味は

其一冊の本を見せて頂戴……(1)

其數冊の本を見せて頂戴……(2)

何でもよい一冊本を見せて頂戴……(3)

何でもよい數冊本を見せて頂戴……(4)

と、以上四通りに解釋が出來る。その何れの意味に用ゐられて居るかは其場合と前後の關係とにより推測せねばならぬのである。

所が英語の方ではそんな推測などいふ曖昧な事は成るべくしない樣、成るべくだけ明瞭に言ふが英語の得色で從て上の四通りの意味をいふには、それぞれ皆違つた言ひ方をする。即ち

Please show me the book.....(1)

plēase（プリーズ）何卒。 shōw（ショーウ）見せてくれ。 mē（ミー）私に。 book（ブック）書物。

Please show me the books.....(2)

Please show me a book.....(3)

Please show me some books.....(4)

斯んな風に「其」といふ事を日本語なら口には出さぬが言外に表はすといふ場合には the といふ冠詞を名詞の「本」に冠し、それが一冊なら book, 數冊なら books として區別し、また「どれでもよい」と別段定めた本を指すでなくば、一冊の時は a book とし、數冊ならば some books とする。

book は一冊で books が二冊以上の事は既に Noun（名詞）の所で説明したから、重ねてこゝに説く必要はあるまい。the の事は次の項に述べるつもりだから、こゝには省いて、a と some との事をこゝでは主として説かう。

a 及び an は此例により察し得らるゝ如く、單數の名詞に附いて「どれでもよい一つ」といふ意味を示すのである。尤も其「一つ」といふ事に強い意味があれば、a の代りに one（一つ）といふ語を遣ふが、その時は日本語なら「本を一冊見せて頂戴」と、矢張一冊と明かに言ふ。

つまり a や an は日本語ではこれを言外の意味として先方に察して貰ふ位で、極々輕い意味の「一つ」といふ事

bōoks（ブックス）書物（複數）。 sŏme（サム）。 ā（エーィ）。 ăn（アン）。 thē（ジー）。

と斯う思へば差支ない。

で、上にもいふ通り若しaの代りにこれを one として

Please show me one book.

と言へば、「一冊」といふ事に強い意味が出來て、見せて貰ひたいのは一冊に限るのだ、二冊でも三冊でもいけないといふ事になり、また

Please show me a book.

といへば、book の方に強い意味があつて、見せて貰ひたいのは書物で、他の物ではいけない、して其書物は一冊といふ位で、一冊といふ方は極々輕い意味である。

それから some といふ語、これは Adjective（形容詞）で、詳しい事は既に「第二英文法の話」に說いた事であるが、この語は單數複數何れの名詞にも附く事の出來る語で、上の例の如く複數に附けば、其意味は「どれでもよい二三冊」といふ事で、つまり a なり an は單數にしか附けられないから、複數の場合其代りに用ゐられる冠詞同樣の意味になるのである。

單數に some を附けて

Please show me some book.

といへば「どれでもよい」といふ事に意味が強くなつて、見せて貰ひたいのは別に注文がある譯ではない、どれでもよいから書物を、それも一冊見せてくれ、といふ位の

意味で、一冊といふ意味よりはどれでもよいといふ事に強い意味があるのである。

以上說明した所により、斯う言ふ結論が得られる。

(1) a 及び an は some one（どれでもよい一つ）といふ意味であるが、特に some といひ、また one といふよりはづゝと其意味が輕く、日本語ならば全く言はないで、言外に推測させる位の所に遣ふものである。

2. a と an との讀方

尙ほ詳しい事は更らに後章冠詞の用法を說く際に讓る事とし、これで一通り a と an との意味は「どれでもよい一つ」といふ事であるとして置いて、では a と an とは前に發音上の便宜により時に a を遣ひ、時に an を遣ふと說明したが、其便宜といふ便宜は如何なるものか、時によりといふ時とは如何なる時であるかといふ事を序に研究して見るとそれは斯うである。

母音で始まる語の前に a を附けては發音がしにくい。

例へば a ant と早く言つて見たまへ。「アアント」これでは「アーント」としか聞へなくなる。a ox とも言つて見玉へ。「アオックス」まるで「青くす」の樣になつてしまふ。言ひ悪い許りでなく聞きとり悪い。

ant（アーント）蟻。 ox（オックス）牡牛。

斯くな次第から

母音で始まる語の前には an を用ゐ。

父音で始まる語の前には a を用ふ。

といふ事になつたのである。丁度日本語にも音便といふものがあつて「水上」を「みづかみ」とは言ひ悪いから、（みなかみ」と言ひ、「水際」の「みづきわ」を「みぎわ」と讀むといふと同じ理屈で、つまり母音の前の a は言ひ悪いから n を一つ添えるといふまでゞある。

唯注意する事は a と an とを附ける必要は斯の通り、發音上の便宜によるので、綴字上の便宜によるのでないから、文字に綴つて見ると hour の如き honour の如き h で始まる語も、發音は h が silent（消字）であるから a を附けるでなく an を附けねばならぬ、また use の如き European の如き one の如き、母音の文字で始まつて居つても、其發音は use は yus で European は yu-ro-pē'an で、one は wŏn で、皆母音で始まるのでないから a を附けて、an を附けるのでないといつた風の、單に綴字の上から見ると間違ひ易い場合が往々にしてある事を心得て居ねばならぬ。

* * * *

hour（アウア）時。 hŏn'ŏur（オナ）名譽。 sī'lent（サイレント）消字。 ūse（ユース）入用。 Ū-ro-pē'ăn（ユーロピーアン）歐洲人。

以上述べた所を一口に言ふと。

a 及び an は some one（どれでもよい一つ）といふ意味で、單數の名詞に附ける極々輕い言葉である。

a と an とは其意味は全く同一で、唯 a は父音で始まる語の前に附け、an は母音で始まる語の前に附けるだけの違ひである。

綴字から言へば h の樣な父音字で始まつても、それが消字で、發音は母音で始まる語には無論 an を附し。

綴字から言へば u や e, o など母音字で始まつても、發音は矢張父音で始まる語には無論 a を附す。

3. the の意味と讀方

the の意味も前項 a や an を說く場合に擧げた例により察し得られたであらうと思ふが、つまり極輕い this, that, these, those といふ意味で、日本語なら特に「この」「あの」「例の」など言はずとも單に名詞をのみいへば、「あの」「例の」の意は言外に察し得らるゝ場合英語では名詞に the を冠すのである。だから

Please show me {this / that} book.

と book に this か that の何れかを添えて言へば、見せて

this（ジス）この。 that（ザット）あの、その。 these（ジーズ）これらの。 those（ゾウズ）あれらの、それらの。

貰ひたいのは外の本ではないこの本だとかあの本だとかこのあのに強い意味があるが、

Please show me the book.

といへば book の方に強い意味があつて、それにこの又はあのといふ輕い意味が附加されて居るまでゞある。

それからこの the の方は a や an の様に單數名詞にのみ添えるのでなく、複數にも添えて差支ない。輕い意味の these や those の代理をもする。

この the は母音の前は an で父音の前は a といふと同じ様に

母音の前では the は thī（ジ）と輕く發音し父音の前では the は thū（ザ）と輕く發音するのである。矢張發音上の便宜からで thī と讀んだ時と thū と讀んだ時と、其間に意味の相違があるなどゝいふ譯では無論ない。

4. Definite Article と Indefinite Article.

上述の通り a と an とは單數の名詞にのみ添ひて「どれでもよい一つ」といふ意味を附し、the は單複何れの名詞にも添ひて「あれ」「これ」「あれら」「これら」などいふ意を附するのである。言ひ替ゆれば a と an とはどれと

Ĭn-dĕf'ĭ-nĭte（インデフィニト）不定の。 Dĕf'ĭ-nĭte（デフィニト）限定の。

定まらぬ意味を添え、the はどれと定まれる意味を添える。

斯んな次第から文法では a と an の事を Indefinite Article（不定冠詞）と名け、the を Definite Article（定冠詞）と名づける。

つまり Article は Definite Article と Indefinite Article と二種に區別する事が出來、前者には a と an とが屬し、後者には the が屬するのである。

第二

Article の用法

1. Adjective との比較

前章に述べた通り Article（冠詞）なるものは其 Indefinite（不定冠詞）と Definite（定冠詞）とを問はず、何れも Noun（名詞）に附屬して其意味を制限する役目をするものである。

所が同じ名詞の意味を制限する役目のものでも Adjective（形容詞）の方は

The *big* dog.（大きな犬）

big（びッグ）大きな。 dŏg（どッグ）犬。

The dog is *big*. (犬は大きい)

の樣に名詞の前後何れに置く事も出來るが、冠詞の方は必ず名詞の前に置かれねばならぬ。決して名詞の後に冠詞を置く事はない。これが冠詞と形容詞との違ふ第一の點である。

Adjective の方は

The *old big* dog.

の樣に一つの Noun に二つ以上の Adjectives を添えて差支ないが、Article は Noun 一つに附いて二つ以上を添える事は出來ぬ、一つの Noun に附屬する Article の數は必ず一つでなくてはならぬ。これが兩者の違ふ第二の點である。

此二ヶ條、これ等が Article と普通の Adjective との相違の主なる點である。

形容詞は名詞の前後何れにも附し、其數は名詞一つに附き二つ以上たる事を得。

冠詞は名詞の前に附し、其數は名詞一つに附き一つに限る。

2. Noun との關係

Article (冠詞) は Noun (名詞) に附屬するものであるが、

old (おゥルド) 老いたる。

何種の Noun にも總ての Article を添えて差支ないといふのではない。Noun の種類に依て Article を添えてよいものといけないものとある。

Proper Noun (固有名詞) は何等の Article をも添えないのが本態で、其中の或物に限り Definite Article を添えねばならぬものと用ひ場所によつて Indefinite Article を添ゆるものとある。詳しくは「初等英文法の話」第十九頁以下を參照せられたい。

Common Noun (普通名詞) や Col'ective Noun (集合名詞) の如き、一つ二つと數へる事の出來る語は單數の場合には必ず何らかの Article がなくてはならぬ。Article なしで單數の形を用ゐる事は或る特殊の場合を除いては全くないと覺えて置いて差支ない。

複數の場合には a や an は無論附ける事は出來ぬ。a や an は「どれでもよい一つ」の意味であるから、二つ以上を表はす語に一つの意ある a や an を附けて不都合な事は言はずとも知れた事である。

the は複數にだつて附けて差支ない。

Material Noun (物質名詞) や Abstract Noun (無形名詞) は一つ二つと數へる事の出來ないものであるから、從て

Prŏp'ĕr (プろパ) 固有の。 Cŏm'mon (こモン) 普通の。 Col-lĕct'ive (コれクティヴ) 集合の。 Ma-tē'ri-al (マてィーリアル) 物質の。 Ăb'străct (あブストラクト) 無形の。

それに a や an を附ける事は出來ない。 the の方は附けて差支ない。

以上之を要するに

固有名詞は (1) 冠詞なしが普通で、(2) 特別の場合 the を附し、また (3) a や an を附す。

普通名詞及集合名詞は單數には (1) the を附すか (2) a や an を附し、何れか必ず一つの冠詞がなくてはならぬ。複數には (1) the を附すか、(2) 冠詞なしかで、a や an を附する事は決してない。

物質名詞及び無形名詞には (1) the を附すか (2) 冠詞なしかて、a や an を附する事は決してない。(複數の形もない)、尙ほ此の詳細は「初等英文法の話」を參照し玉へ。

3. Article に代る語。

上項に Article を附けねばならぬ場合を述べたが、次の如き語は Article の代用をする語で、これ等の何れか一つがあれば、上に是非 Article がなくてはならぬ、といつた場合にでも、これを缺いて差支ない、イヤ、既にこれ等が代用して居るのだから、Article があつてはならぬ事となる。

その語といふのは

1. My, our, your, his, her, its, their 等の所有格の Pronoun.

2. Whose, what, which 等の疑問形容詞。

3. This, that, these, those 等の指示形容詞。

4. Some, any, no, each, every, either, neither 等總ての數量形容詞。

5. 所有格の名詞、例へば *May's* book, my *father's* cane などの Italics (斜體) の語。

だから、此等の語のある時は。

My a book, Fred's the cane.

など Article を遣つては誤りである。以上の語を文法では Article の Equivalent Words (類似語) といふのである。

4. Article の位置

Article (冠詞) は前に述べた通り、其附屬する Noun の前に置くものであるが、其所屬の Noun を說明する Adjective がある時は、Article は更らに其前に置かるゝのが普

mȳ (マイ) 私の。 our (アウア) 私共の。 yoūr (ユーア) 汝の、汝等の。 hĭs (ヒズ) 彼男の。 hĕr (ハー) 彼女の。 its (イツ) その。 thĕir (ゼア) 彼等の。 whōse (フーズ) 誰れの。 what (ホット) 何の。 which (ホイッチ) どの。 Māy's (メーィズ) メーィ(人名)の。 fā'thĕr's (ふァーザズ) 父の。 cāne (ケィン) 杖。 Ī-tăl'ĭc (イたリク) 伊太利體。 any (ĕn'ȳ) えニイ。 ēach (いーチ)。 ĕv'ĕr-ȳ (えヴァリ)。 ēi'thĕr (いーザ)。 nēi'thĕr (にーザ)。

通である。だから

A man. と man に附く a が

A tall man. の如く man を説明する形容詞 tall が來れば更らに其前に置き、また

A tall old man. の如く二つの形容詞があれば、更らに其前に置く。そして其冠詞は

An old man. 直ぐ次の語が母音で始まる語であれば an と替る。

つまり a や an は名詞の man に附く語である事は勿論だが、其間に形容詞があれば其形容詞の發音が母音で始まるものであれば an を用ゐ、父音で始まるものであれば a を用ゐて、名詞の發音の如何には從はぬ。だから An ox. と ox だけなら an が附くは無論だが、こゝへ更らに big が來れば a big ox. となり、black が來ても tall が來ても A big, tall, black ox. の如く直ぐ次の語が父音で始まる big だから a であつて An ox. の際の an ではない。尤も更らに old といふ形容詞が來ると An old, big, tall, black ox. の如く an になるが、これは次の語が母音で始まる old なるが故で、名詞が ox なるが故ではない、

つまり冠詞は名詞に屬するものであるが、その a と an

e-quiv'ä-lent（イくゥィヴァレント）wŏrds（ゾーヅ）。 măn（マン）人。 tal'（トール）背高き。 blăck（ブらック）黑き。

(the も thĭ と讀み thŭ と讀む）の區別は次に來る語の發音如何によるので、名詞の發音如何によるのではないと心得て置くがよい。

尤も或る特殊の Adjective（形容詞）に限り、Article（冠詞）を後に置くものもあるが、それは今少し Article の事を説明し盡くした上で言ふ方が間違ひを起す恐れがなくてよからうと思ふから、こゝには言はぬ。今は兎も角斯う覺えて置かるゝがよい。

冠詞は名詞に附く語であるが、名詞の前に形容詞があれば、其形容詞の前に冠詞は置く。

A と an (thŭ と thĭ) と何れを用ゐるかは、次の語の發音如何に依て定め、名詞の發音如何に依て定めるのではない。

I. Indefinite Article の用法

以上説明した所は Indefinite Article（不定冠詞）と Definite Article（定冠詞）と兩方に共通の用法である。以下

其各々に就て更らに詳しく研究せねばならぬ。先づ Indefinite の方から始めよう。

Indefinite Article (不定冠詞) は前にも述べた通り. (1) Common Noun (普通名詞) と (2) Collective Noun (集合名詞)の Singular Number (單數) に限り附せられるもので其等の Plural Number (複數) や、また Material Noun (物質名詞や) Abstract Noun (無形名詞) には決して附ける事は出來ないものである。それも其筈で、a 及び an は前に述べた通り some one (どれでもよい一つ) といふ意味だから複數の名詞には勿論、一つ二つと數へる事の出來ぬ物質名詞や無形名詞には附けられぬ道理である。

不定冠詞を附するは主として單數の普通及び集合名詞に限る。

此事は充分記憶して置いて頂きたい。尤も Proper Noun (固有名詞) には不定冠詞を附する事がある。此事は既に「初等英文法の話」19 頁以下に説明して置いたから參照せられたい。尙ほ後項にも一通りは記述する豫定である。

* * * * *

扨、單數の Common (普通) 又は Collective (集合) Noun (名詞) に a 又は an を附けると、其 a 又は an は如何なる意味を其名詞に附するかといへば、大體次の六つの内のどれか一つである。

(1) 其名詞を generalize す。
(2) 其名詞の whole class を表はす。
(3) 其名詞の a certain なる意味を附す。
(4) 其名詞に one なる意味を附す。
(5) 其名詞に the same なる意味を附す。
(6) 其名詞に per の意味を附す。

以下其一つ一つに就き説明しよう。

(1) 其名詞を generalize す

Generalize といふ語は general (一般の、總ての) といふ形容詞から變化した動詞で「一般にする」「普遍的にする」といふ意味の言葉である。だから不定冠詞の a や an を名詞に附けると、其名詞が一般的に普遍的になつて、其名の物ならどれにても通用する樣になる事を意味するのである。

例へばこゝに dog といふ名詞がある。これに若し定

gĕn'ĕr-ăl-ize (ヂェナライズ)。 whōle (ホゥル) 全體の。 class (クラス) 階級。 çĕr'tain (さーテン)。 sāme (セィム)。 pĕr (ぱー)。

冠詞の the を附ければ「あの犬」「この犬」と或る特別の犬を意味する事となり、his dog, her dog などいつても「彼男の犬」「彼女の犬」と或る犬に限られる事になるが、これに反し a dog と不定冠詞を附ける時は、「どれでもよい一疋の犬」といふ意味になつて、犬はどれと限定されない、苟も犬であればどれでもよい、一頭といふ事になる。されば dog なる語は a なる不定冠詞を附せられたに依て、其意味一般的に普遍的になり、總ての犬何れにでも通用する事となつたのである。

こんな風の a 及び an の用法を、其名詞を generalize するものといふのである。

Give me a pen.〔ペン先を一本下さい〕苟もペン先であれば何でもよい、別段注文はない且つ其數は一つでよいとの意味は此 a を pen に附けたに依て明示されて居る、即ちこの a は pen なる Noun を generalize して居るのである。次に示す各例の a 及び an も皆同樣、それぞれ次の名詞を generalize して「どれでもよい一つ」の意を附加して居るのである。

Did you ever ride a *horse*?

〔馬に乘つた事があるか〕。

ĕv'ĕr (えヴァ) 嘗て。 ride (らィド) 乘る。 hôrse (ホース) 馬。

I perfer a *good man* to a *rich man*.

〔金持ちよりは善人の方がよい〕。

Have you an apple? 〔林檎をお持ちですか〕。

(2) 其名詞の whole class を表はす

Whole class (全體) といふのは其物總體をいふのて、例へば。

Here is a horse. 〔此處に馬が居る〕。

の a horse は「或る一頭の馬」であるが、

A horse can rnn faster than a cow.

〔馬は牛より早く走る〕。

の a horse は「或る一頭の馬」の意でなく、「どの馬もどの馬も、馬でさへあれば悉く」の意で、即ち馬の whole class (全體) を示して居るのである。a cow も同樣牛の全體を示して居るのである。だから上の如く a 又は an は其名詞の全體を示す事になり、書き替えて次の如くするも全く同樣の意味となるので、これを whole class を示す Indefinite Article (不定冠詞) といふのである。

Any *horse* can run faster than **any** *cow*.

〔どんな馬でもどんな牛よりも早く走る〕。

pre-fĕr' (プリふァー) 選ぶ。 rich (りッチ) 富める。 ăp'ple (あプル) 林檎。 făs'tĕr (ふァスタ) than (ザン)……より一層早く。 cow (かゥ) 牛、牝牛。

All *horses* can run faster than all *cows*.

〔あらゆる馬はあらゆる牛よりも早く走る〕。

The *horse* can run faster than the *cow*.

〔馬なるものは牛なるものより早く走る〕。

Horses can run faster than *cows*.

〔馬は牛より早く走る〕。

つまり whole class を示す a 及び an は any 又は all と同一の意味で、單數名詞に the を示し、又は複數名詞に何等の冠詞を附せぬも等しき意味を示すものと覺えて居ればよい。

次の各例の a 及び an は 總て其次の名詞の whole class を示して居るものである。

A son should obey his father.

〔息子は誰れでも其父に從はねばならぬ〕。

A burnt child fears the fire.

〔やけどした事のある小供は誰れでも火を恐れる〕。

Can you spin a top?

〔君は獨樂といふものを廻せるか〕。

ȯl′（オール）總ての。 an′ȩ（えニ）どれでも。 hôrs′eȩ（ほーシズ）馬。 sŏn（さン）息子。 shoȯ′d（シャッド）……すべし。 o-beȳ′（オベィ）從ふ。 bûrnt（ばーント）やけどした。 child（ちァィルド）小供。 fēar（フィーア）恐れる。 fīre（ファィア）火。 spĭn（スぴン）廻す。 tŏp（とップ）獨樂。

An eagle is a large and strong bird.

〔鷲はどれも大きく且つ強い鳥だ〕。

(3) 其名詞に a certain の意味を附す

A certain は譯して「或る」とか「某」とかいふが、同じく「或る」と譯する some や any とは全く其意味に區別がある。此事は「第二英文法の話」70 頁に次の如く說明して置いた。

Certain の方は「如何なる人又は物」と言ふ人又書く人には解り解つて居て、その名を態と明示せぬ場合に使ひ、some の方は其名の解らぬ時に使ふのである。だから。

A certain lady called in my absence.

〔何某といふ貴女が僕の留守に訪ねて見えた〕。

Lady の名は自分には解つて居るが、それをあかして言はぬのである。所が。

Some lady called in my absence.

〔或る貴女が僕の留守に訪ねて見えた〕。

Lady の來た事は確かだが、何といふ名の lady か、それは當人にも解らぬのである。云々。

つまり其人の誰れかといふ事がこちらに解つて居つて

ēa′gle（いーグル）鷲。 lärge（らーヂ）大きい。 strŏng（ストろンク）強い。 bīrd（バード）鳥。 lā′dȳ（れィデ）貴女。 cal′ed（コールド）訪ふた。 ăb′sence（あブセンス）不在。

も、その儘打明けて言はぬ時に a certain を用ゐ、其人となりだけが解つて居ても、誰れであるか解らないて誰れか知ら兎に角一人のといふ意味の時には some (疑問文や否定文ならば any) を使ふのである。

所で a 及び an をこの a certain の意味に遣ふ事がある。例へば。

An old woman was washing her clothes in **a** river. 〔或る老婆が或る川で自分の着物を洗濯して居た〕。

こゝの an old woman といひ、a river といふの a や an は前に示した (1) や (2) の用法のものでない。何故といひ玉へ。こゝの意味は (1) の如く「どれでもよい一人の老婆」「何所でもよい一つの河」といふ意でも、また (2) の如く「老婆といふ老婆悉く」「河といふ河悉皆」といふ意でなく、「名こそ言はぬが或一人の老婆」「名を言はぬが或る一つの河」の意で、即ち an や a は a certain の意を示して居るのである。次の各例も皆同じである、一々説明せぬから讀者自身で考へて見玉へ。

A great king once stopped at a pretty little village. 〔或る偉い王様が或る時或る美しい小村に御滯在でございました〕。

wom'an (ゥゥマン) 女。 wash'ing (ゥォッシング) 洗つて。 clō*the*s (クろゥズ) 着物。 riv'er (リヴァ) 川。 great (グれィト) 偉い。 king (きング) 王。 on*ce* (ワンス) 或時。 stōp*p*ed (スとップト) 止まつた。 prĕt'*t*ȳ (プリティ) 美しい。 lit'*t*le (リトル) 小さき。 vil'*l*age (ヴィレヂ) 村。

I am reading **a** novel.

〔自分は今某小説を讀んで居る〕。

(4) 其名詞に one なる意味を附す。

One といふ語も前項の a certain と同一の意味をあらはし。

He is **one** Tanaka.

= He is **a certain** Tanaka.

= He is **a** Tanaka.

〔彼は田中某といふ人です〕。

の如く用ゐられるが、こゝにいふ one の意味といふは、其種の one でなく、普通の「一つ」といふ意味をいふのである。即ち (1) の用法の如く「どれでもよい一つ」でなく、此用法は單に「一つ」といふだけで「どれでもよい」といふまでの意味は附けないのである。例へば。

In a day or two.

といふ句は、

In one or two days.

と書くも同じて日本語の「一兩日中に」といふ意、即ちこゝの a は one (一つ) といふ意味を單にあらはして居るだ

rēad'ing (リーディング) 讀んで。 nŏv'el (のヴェル) 小説。 dāy (デーィ) 日。 two (トゥー) 二。

けのものである。次の各例のa又はanも皆同樣である。

Don't try to do two things at a time (=at *one* time).

〔一時に二つの事をなさんと思ふなかれ〕。

日本の二兎を追ふものは一兎を得ずと同じ意味の句である。

A bird in the hand is worth two in the bush.

〔手の中の一羽の鳥は藪に居る二羽の鳥の價値がある〕日本の諺の「後の百より今五十」などいふに當る。

I want a table and some chair.

〔卓一個と椅子數脚がほしい〕。

I saw a man and some children.

〔大人一人と小供數人とに出遭つた〕。

(5) 其名詞に the same の意味を附す

The same (同一の) といふ意味をa又はanが示す事があるとは、次の如き例のものである。

Birds of a feather flock together.

dōn't (ドゥント) =do not, trȳ (トライ) 試むる。 tọ dọ (トゥードゥー) 爲さんと。 thingṣ (シングス) 物事。 tīme (タイム) 時。 hănd (ハンド) 手。 wŏrth (ゥォース) 價値ある。 bụsh (ブッシ)藪。 tā'ble (ティブル) 卓。 châir (ちェア) 椅子。 sạw (ソー) 見た。 child'ren (ちルドレン) 小供 (複數)。 fĕath'ĕr (ふェザ) 羽毛。 flŏck (フろック) 群がる。 tọ-gĕth'ĕr (トげザ) 共に。

〔同じ種類の鳥は一つ所に群がり集るものだ〕。

日本の「類を以て集る」と同じ意味の諺である。

Two of a trade can never agree.

〔一つの商賣の者二人は決して中よくは出來ぬ〕。

日本の「商賣敵」とか「兩雄並び立たず」などいふと同じ意味である。

(6) 其名詞に per の意味を附す

Per (……に付) の意をa及びanが示す事があるとは。

I go there twice a month.

このa monthはper month又はevery monthと書き直すも同じ、即ち「毎月」「一月に付」の意である。

斯んな類のa及びanも澤山其例はある。

The price is twenty sen a pound.

〔一ポンドに付二十錢です〕。

We walked at the rate of three miles an hour.

trāde (トれィド) 商賣。 nĕv'ĕr (ねヴァ) 決して……ぬ。 ȧ-grēe' (アグリー) 一致する。 twīçe (トわィス) 二度。 mŏnth (もンス) 月。 ĕv'ĕr-ȳ (えヴァリ) 毎。 prīçe (プらィス)價。 twĕn'tȳ (トゥェンティ) 二十。 sĕn (セン) 錢。 pound (ぱゥンド) 磅、ポンド、一磅は約我が百二十匁に當る。 wạ/ked (ゥォークト) 歩んだ。 rāte (レィト) 割合。 mīle (まィル) 哩、一哩は約我が十五町に當る。

〔一時間毎に三哩の割合で歩んだ〕。

I have lived on fifteen shillings a week.

〔毎週十五志で暮らして居た〕。

* * * * *

以上六個の意義、大抵の a や an は皆其中のどれか一つの意義をあらはして居るのである。尙ほ詳しく言ふと此外にまだ。

(7) Definite Numerals (定數) に附いて。

A hundred (百)　　A thousand (千)

A million (百萬)　　A dozen (十二)

A score (二十)

など a=one の意味を表はすこと、上の第四項と同じであるが、元來 Article なるものは Noun (名詞) に附くべきものであるに、これは斯く Adjective (形容詞) の Numeral に附くのであるから、見易き爲め別項にしたのである。

だから a hundred men といへば其 a なる冠詞は形容詞の hundred に附屬して居るので、名詞の men に附いて居るのではない、無論 a や an は單數名詞にのみ附くので men の如き複數に附くのでないから、間違ふ筈はないの

hāve lived (ハヴリヴド) (今まで) 生活して居る。 fif'teen (ふィフティーン) 十五。 shil'ling (しリング) 志、シリング、一志は約我が五十錢に當る英貨の名。 wēek (ゥィーク) 週。 hŭn'dred (はンドレド)。 thous'and (さゥザンド)。 mil'lion (みリァン)。 dŏz'en (だズン)。 scôre (スこーア)。

だが丁度其形が、a good man の a は good に附くのでなく man に附くのであるといふとよく似て居るから、若しか初學者に誤る者があつてはとの掛念から一言注意して置く。

(8) A はまた次の樣な形容詞に附く。

A great many (澤山の)。

A good many (澤山の)。

A few (少しの)。

A little (僅かの)。

此等は鳥渡考へると many といひ few といひ何れも數を表はしながら、a (一つ) を附けるは變だと思はれるが、それは a good many なり a great many なり、總てそれだけで一つの熟語と思つて、理屈をぬきに覺えて置くがよい、詳しくは「第二英文法の話」に說明して置いた。

(9) 名詞を反覆する代りに遣ふ代名詞の one, 此語が單にそれだけ遣はれる時は。

Have you a peach? Yes, I have one.

の樣に無論冠詞など附けないが、若しこの one に形容詞が添ふと。

Yes, I have a *ripe one*.

の樣に冠詞の a 又は an を附けねばならぬ。尤も複數の場合であれば。

pēach (ぴーチ) 桃。 rīpe (らィプ) 熟したる。 ones (わンズ)。

Yes, I have **some** *ripe ones.*

の樣に a 又は an の代りに some を遣ふ。

以上 (1) 以下 (6) 迄は普通の a 又は an の用法で、總て名詞にのみ附屬するもの (7) 以下 (9) は變則の用法で、總て名詞以外の語に附屬するもの。Indefinite Article たる a 及び an の用法は先づ斯んな事である。

以上説明した Definite Article のことを複習の便宜の爲め一覽表にすると斯うである。

Indefinite Article の一覽表

I. 其意味——Some one (何でもよい一つ)。

II. 其讀方——特別に明白にいふ必要のない限りは、ă, ăn と輕く讀む。
特別に明白にいふ必要のある時には、ā, ān と强く讀む。

III. 其用法——a は父音で始まる語の前に附け an は母音で始まる語の前に附ける。
單數の普通名詞及び集合名詞に限り附けるもので、其他の名詞其他の品詞には附けないが普通。
但し時に固有名詞に附けて「……といふ」といふ意味を表はす。また物質名詞無形容詞も其れが普通名詞の樣な意味に用ゐられる時は a, an を附ける事がある。
a, an を名詞に附けると。
(1) 其名詞を generalize す。
(2) 其名詞の whole class を表はす。
(3) 其名詞に a certain の意を附す。
(4) 其名詞に one の意を附す。
(5) 其名詞に the same の意を附す。
(6) 其名詞に per の意を附す。

a, an はまた名詞以外のものに附く事がある。
(7) Definite Numerals に附し、one の意を表はす。
(8) 熟語となつて a great many, a good many, a little, a few など形容詞に附く。
(9) 代名詞の one に或る形容詞ある時は a, an が附く、a ripe one の類 (但し單に one のみのは a や an は不用)。

IV. 其他の注意。

1. 形容詞との比較—單數の名詞に a, an を附すと同じ意味の複數には some (問の文や否定文には any) を附す。だから some や any は a や an の複數—ではないが—と思つてもよい。
2. 次の種類の語が附いて居る時は單數の普通名詞や集合名詞にでも a, an を附すに及ばぬが、これなくば必ず a 又は an を附けねばならぬ。(1) the (2) my, our, your, his, her, its, their 等の所有格代名詞 (3) this, that, these, those 等の指示代名詞 (4) whose, what, which 等の疑問形容詞 (5) 所有格の名詞 (6) some, any, no, each, every, neither 等總ての數量形容詞。
3. a, an の位置は名詞の前に附けるが普通。若し其名詞に形容詞が附けば更らに形容詞の前に附けるが普通、但し such a thing, half a month など形容詞の後に置くべき特例もある。

II. Definite Article の用法

Definite Article (定冠詞) は前にも言つた通り the 一つで、それが特に明かに示す必要の時は thē と讀み、さうでなくば輕く短く、母音の前には thĭ, 父音の前には thŭ と讀むのである。*

* よくこの the を thē (ゼ) と讀む人があるが、そんな發音法はないのだから、注意せねばならぬ、明治維新前後の日本の英學生は此語を t-hē (トヒー) と讀んだといふ事で滑稽千萬であるが、thē と讀むも吾人から見ればこれに劣らぬ滑稽である。he, we, me, be など總て斯んな父音一つの次にあつてそれで終る e は ē と讀むが英語の規則である。

此語は前にも述べた通り、總ての名詞を通じて附ける事が出來、また單數、複數の何れにも附ける事が出來るので、此點は Indefinite Article の單數の普通、集合の兩名詞に限り附け得らるゝを普通とするものとは、大分其趣を異にして居るから、よく其事を心得て置かねばならぬ。

ではこの Definite Article 即ち the が Noun に附くと其 Noun に如何なる意味を附するかといへば、前にも述べた通り、此語は this, that, these, those (この、あの、その、例の)の弱い形で、日本語ならば口に出して「その犬」「この本」と言はず、單に「犬」「本」といひながら、言ふ人の心持にも聞く人の心持にも、「その犬」「この本」といふ事が言はず語らずの間に理解さるゝ場合、英語ではこの the を名詞に附すので、言はゞ the は日本語ならば明かに口にはせねど、言はず語らずの間に「その」「この」等の意味をなすもの、これに相當するものがこの the であるが、それはthe 普通の用法で其他にもまた特別の用法がないではないこれ等をも併せ擧げると大略次の八つの内のどれか一つの意味を名詞に附するのである。

(1) 其名詞を particularize す。

(2) 其名詞の whole class を表はす。

pär-tic'u-lär-ize (パティキュラライズ)。

(3) 或る種の普通名詞には習慣上必ずこれを附す。

(4) 或る種の固有名詞には習慣上必ずこれを附す。

(5) 或る語に附して句となる。

(6) 單數の普通名詞に附して無形的の意味を表はす。

(7) 固有名詞に附して普通名詞の意味を表はす。

(8) 前置詞 by の次に附して measurement を示す。

以下例により其細目に渉つて說明して見よう。

(1) 其名詞を particularize す

神田の文典などには。

The Definite Article particularizes a noun.

〔定冠詞は名詞を particular の意にするものなり〕。

と定義が擧げてある位で、これが Definite Article の用法中の最も普通のもの、此外のは或る場合に限らるゝ特別用法と見てよい位のものである。

では、この particularize すといふのは、一體どんな事をするのかといふと、それは斯うである。

例へばこゝに dog といふ語がある。單にこの儘であれば黑犬、白犬、大きな犬、小さな犬、自分の家の犬、隣家の犬、どんな種類、どんな所の犬にでもこれを遣ふ事

mĕas'ure-ment (めヅュアメント)數量。 pär-tic'u-lär(パティキュラ) 特別の。

が出來る。所がこれに Definite Article (定冠詞)を附して the dog といふと、其意味はグッと狹くなる、即ち particular (格段) になつて、あの犬、この犬、例の犬と言ふ人、聞く人共にどの犬と理解する事の出來る犬にしか遣はれなくなる。

斯んな風に Definite Article (定冠詞) は Noun (名詞) に附くと其意味を狹く、其代り明かにする、即ち格段にする、此事を文法では particularize (格段にする)といふので、つまり前から幾度も述べた日本語ならば「あの」「この」「その」「例の」などいふ語を口には言はぬが、言ふ人聞く人の間に言はず語らずの間に其意味が表はれて居るものゝ事を表はす時、其名詞に附する the の事で、particularize など六つかしい術語を遣はねば讀者は既に先刻御承知の用法なのである。

The は斯くの如く聞く人と話す人との間に「どの」といふ事の理解されて居る名詞に限り冠するものであるから、若しも先方に「どの」何であるか解らない樣のおそれある際には決して遣つてはならぬ事は言ふまでもない事である。例へば「僕は時計を持つて居る」といふ際其時計はどんな時計か聞く人がよく知つて居る例の時計といふにあらざる限りは I have the watch. といふ事は出來ない、必ず I have a watch. 不定冠詞の方を附ける事にせね

ばならぬ。併し其時計は先方のよく知つて居るもので、「僕は(君の御存知の)例の時計を持つて居る」の意ならば the を遣つて I have the watch. として差支ないは無論である。

また始めは先方の知らない時計で、I have a watch. と一度は話したものでも、既に一度斯う話した後は。

The watch is in my pocket.

〔その時計はかくしにある〕。

Do you want to see the watch?

〔その時計を見せようか〕。

といつた風に、まだ其實物を見せない以前でも、遠慮なく the を遣つて差支はない。それは一旦時計といつて其觀念が對手の頭の中に起つた後であるからである。

以上いつた事を一口にいふと……始めて或る名詞をいふには a 又は an を附け、其後は總て the でよいといふ事である。

次の例を見給へ。

This is a book. I put the book on the desk. Do you see the book?

---

wạtch (ウォッチ) 懐中時計。 pŏck'et (ポケト) かくし、隠嚢。 want to see (ウォントトゥスィー) 見たいと思ふ。 pụt (プット) 置く。 dĕsk (デスク) 机。

The を遣ふのは話す人自らにどれと解るだけでなく、聞く人にも必ずどれと解つたものでなくてはならぬ。だから「私に母があります」母は一人しかない、きまりきつたものであるが、始めて言ふ時には I have a mother. でなくてはならぬ。I saw a lion. も其通りで話す人には自分の遣つた獅子だから解り切つて居るが、對手には始めてだから a を遣ふのである。

Yesterday I gave you a knife. Have you the knife with you now? Yes, I have it in my pocket. Show me the knife. Here it is.

* * * * *

所でこゝに一つ注意すべき事がある。それは前に何の話もなく突然。

Let us take a walk in the park.

〔公園を散歩しようでないか〕。

などいふ事がある。此用法は上に述べた始めては a か an で二度目からは the といふ規則に背く樣であるが、それは斯うなのである。

此際 the park といふのはいつも互によく行きつけて居る公園で、特に何處の公園など言はずとも、the park といひさへすれば聞く人が「ハヽンあの公園」と容易に理解するからで、だから突然始めて the を遣つた樣ではあるが、實はこれまでに數十百度も其 park の事は話もし行きもしたもの、だから the を附けても差支ないと斯ういふ次第なのである。

此んな例の突然 the を附ける事は澤山ある。

yĕs'tĕr-day (いェスタデ) 昨日。 gāve (ゲィヴ) 與へた。 knīfe (ナィフ) 小刀。 shōw (ショーウ) 見せる。 hēre (ヒーア) こゝに。 tāke à wạlk (てィクアうォーク) 散歩する。 lĕt ŭs (レットアス)..... しようでないか。 pärk (パーク) 公園。

We saw him at the station.

〔スティシァンで彼に遭つた〕。

東京の樣な幾つも station のある所ならいざ知らず、地方の小都會では單に station といへば一つしかないから聞く人に the station といへば「どのスティシァン」か直ぐ解る。

The Empress saw the Emperor off at Shimbashi.

〔皇后陛下には新橋に天皇陛下を御見送り遊ばされたり〕。

The Emperor といひ the Empress といふ以上、日本人ならずとも日本に在る者は等しく日本の今上天皇、皇后なる事は容易に一イヤ考へずとも無意識の中に悟る。だから突然始めから the を附けて少しも差支ない。

これと同樣で、よく英國の書物や新聞雜誌に the king (王) だの the queen と書いてあるのは總て英國現代の國王陛下、女王陛下の事であり、米國のに the president とあるは米國の現大統領たる事は無意識に解るので、從て突然に始めから the を附けて差支ないのである。

Come into the garden. 〔庭へおはいり〕。

これは我が家の庭。

stā'tion (スてィシァン) 停車場。 Ēm'press (えムプレス) 皇后。 Ēm'pĕr-ŏr (えムペラ) 天皇。 sạw ŏff (ソーオフ) 見送つた。 quēen (クゥィーン) 女王。 prĕṣ'i-dent (プれズィデント) 大統領。 gär'den (ガードン) 庭。

Shut the door〔戸をお閉め〕。

これは其命ぜられた人の手近かの戸である事は the あるによりて解り、また突然に始めからでも the を附けて差支ないのである。

斯んな風に始めて言ふ名詞でも、其何たる事が context (前後の關係) により對手に容易に悟られるものであれば定冠詞を附ける。

* * * * *

これも前後の關係、即ち context に依て解るからと説明しても差支ないが、次の樣な of 何々といふ説明句が附く場合には、始めて突然出る名詞にても the を附ける。

The principal of this school (此學校の校長)。

The capital of England (英國の首府)。

The Emperor of China (支那皇帝)。

The water of this well (此井戸の水)。

The works of Sanyo (山陽の著書)。

The wisdom of Socrates (ソクラティースの智慧)。

併しながら次の如きもの、即ち其 of 以下のものに澤山 of 以前のものがあり、其中の一つといふ事を意味する場合

shŭt (シャット) 閉ぢる。 dōor (ドゥア) 戸。 cŏn'text (こンテクスト) 前後の關係。 prĭn'-çĭ-pàl (プリンスィパル) 校長。 scho̅ol (スくール) 學校。 căp'i-tàl (かピタル) 首府。 Chī'nà (ちァィナ) 支那。 wa̧'tĕr (うォータ) 水。 wĕl' (うェル) 井戸。 wōrks (うォークス) 著書。 wĭs'dom (うィズドム) 智。

には a を遣ふ。

A studend of this school. (此學校の或生徒)。

A city of England (英國の一都市)。

A minister of China (支那の一大臣)。

其理由は説明せずとも、常識を以て考へれば無論解る事と思ふ。

併しながら上の student や city, minister の如き澤山あるものでも、其全體を指す時は複數にして矢張 the を附ける。

The students of this school (此學校の (全) 生徒)。

The cities of England (英國の (全) 都市)。

The ministers of China (支那の (全) 大臣)。

(2) 其名詞の whole class を表はす

此事は a, an の部の用法の (2) (第 23 頁) にも鳥渡言つた通りで。

The horse can run faster than the cow.

=A horse can run faster than a cow.

=Horses can run faster than cows.

=All horses can run faster than all cows.

=Any horse can run faster than any cow.

stū'dent (スてューデンド) 學生。 çĭt'ȳ (すィテ) 都市。 mĭn'ĭs-tĕr (みニスタ) 大臣。

總ての文は「總て馬なるものは牛なるものより早く走れるものだ」と horse なり cow なりの whole class(總體)を示す事になつて居るのである。

詳しくは第 23 頁の所を見られたい。

例外 所で、こゝにこの whole class を表はすには其單數の形に a 又は the を附けるか、複數に冠詞なしといふ規則に從はぬ、例外の語が二つある。

それは man(男、人間)と woman(女)と、この二語である。此二語は單數の形のまゝ、何等の冠詞を附けないで其 whole class を示すので、若し the を附けると the man(あの人)の樣になり、a を附けると a man(或る一人)といふ事になつてしまう。men や women はよい、この複數の形に何等冠詞を附けなくば規則通り其 whole class を示す。

だから「人間」「男」「女」といふ全體を示すには、單數の man, woman 又は複數の men, women 何れかに何等の冠詞を附けないで置けばよいといふ事になるのである。

Man is the noblest of all beings.

=**Men** are the noblest of all beings.

〔人は萬物の靈なり〕。

Woman is nobler than **man** in many respects.

nō'blest (のゥブレスト) 最高尚なる。 bē'ing (びーイング) 生物。 nō'blēr (のゥブラ)一層高尚なる。 re-spĕct' (リスペクト) 點。

=**Women** are nobler than **men** in many respects.

〔女は種々の點に男より優れた所がある〕。

此二語の外には一切例外はない。

(3) 或種の普通名詞には習慣上必ず the を附す。

これは (1) の中に入れて其何たる事が對手に容易に悟られるから the を附けるのであると說明してもよいが、或る普通名詞は決してこれに不定冠詞の a や an を附ける事なく、いつでも一假令突然の始めてゞあらうが何であらうがそんな事には一切頓着なく the を附けるのである。其主なるものを擧げると。

the sun (太陽)	the moon (月)	the world (世界)
the earth (地球)	the sky (空)	the country (田舍)
the bible (聖書)	the alphabet(ABC)	the universe(宇宙)

此中 earth は「土地」「土」の意にもなるが、こゝにいふのは「地球」の意の時に限るのである。また country は「國」の意にもなるが、こゝにいふのは「田舍」の意の時に限るので、それは town (都會) 以外の地方總てを指

sŭn (さン)。 mōōn (ムーン)。 wŏrld (ゥォールド)。 ĕarth (アース)。 skȳ (スカイ)。 coŭn'trȳ (カントリ)。 bī'ble (ばイブル)。 ă'lphă-bet (あルファベト)。 ū'nĭ-vērse(ゆーニヴァス)。 town (たゥン)。

すので、また「地方」と譯してもよい。

以上の名詞は普通名詞であるが、人に依ては固有名詞として大文字で書く事もある。何れにしても the を必ず附けねばならぬのである。

其 the には別段何等の意味あるのでない、唯習慣上これ等の語には the を附けるといふまでゞある、the が何等の意味を其附屬する名詞に附けるといふのではない。

(4) 或種の固有名詞には習慣上必ず the を附す。

これは既に「初等英文法の話」第十九頁以下に詳しく述べた事であるから、繰返してこゝに言ふ必要はなからうと思ふ。次には復習の便宜を思つて、the を附けねばならぬ Proper Noun (固有名詞) と、附けるに及ばぬ Proper Noun との一覽表を出すに止めて置かう。

それから一言注意する事は此 Proper Noun に附する the もまた前項の the と同じく何等の意義を其附屬する Proper Noun に附加するのではなく、唯習慣上これを附けねばならぬ事になつて居るといふ事である。

I. the を附すべき固有名詞

1. 河川の名 2. 海洋の名 3. 山脈の名 (但し一つの山の名には不用) 4. 船艦の名 5. 複數の固有名詞 6. 建物の名 7. 英國以外の官職名 8. 書籍、新聞、雜誌の名 (本來の固有名詞には不用)。9. 固有名詞に形容詞を附加したる時(但しold, young, little, dear, good, poor, honest 等日常慣用の形容詞の際に限り不用)。10. 普通名詞の如く用ゐられたるもの (これには a, an を附し、また複數にする事もあり)。

II. the を附するに及ばざる固有名詞

1. 人名 2. 國名 3. 郡縣等の名 (但し the Province of Suruga の如き of を用ゐたる形には入用) 4. 孤島 (併し群島は複數の固有名詞として上の 5 に入る) 4. 市町村名 (但し the Hague の如く入用のもの一二あれど、それは眞の僅かなり) 6. 湖の名 (但し the Lake of Geneva の如く of の形を用ゐれば入用) 7. 岬の名 (これも the Cape of Good Hope の如く of の形には入用) 8. 月の名、曜日の名 9. 祭日の名 10. 町 (street)の名 11.

prōv'ĭnçe (プロヴィンス) 國。 Hāgue (ヘイグ) 和蘭の首府。
Ge-nē'vā (ヂニーヴァ) 瑞西の湖。 Cāpe of Gōōd Hōpe (けイプオヴグッドほゥプ) 喜望峰(亞弗利加の南角)。

公園の名 12. 橋の名 13. 停車場の名

先づ大體斯んな事である。人により the Hibiya Park だの the Ryogoku-bashi, the Shimbashi station など the を附ける人がないではないが、普通は先づ the は不用といふ說になつて居る。

(5) 或る種の語に附して句となる

これも何故 the を附けるかといふ理屈があるのでなく、また其 the はこれこれの意味を名詞に附するといふわけでもなく、唯習慣上斯んな場合には the が附いて一つの phrase (句) を作るといふまでのものである。其主なるものを擧げると次の通り。

1. in the north, in the south, in the east, in the west.
2. on the right, on the left.
3. in the morning, in the evening, in the afternoon, in the daytime (併し at night, at noon などいふに注意)
4. in the light, in the dark.
5. for the future, for the present (併し in future, at

phrāse (フれィズ)。 nôrth (のース) 北。 south (さゥス) 南。 ēast (いースト) 東。 wĕst (うェスト) 西。 rīght (らィト) 右。 lĕft (れフト) 左。 môrn'ĭng (もーニング) 朝。 ē'ven-ĭng (いーヴニング) 夕。 äft'ēr-noon (あフタヌーン) 午後。 dāy'time (でーィタィム) 日中。 nīght (ナィト) 夜。 noon (ヌーン) 正午。 light (らィト) あかり。 därk (だーク) 暗。 fū'ture (ふュチァ) 未來。 prĕs'ent (プれゼント) 現在。

present ともいふ)。

6. in the right, in the wrong.

例. Both of you can not be in the right.

〔兩方が兩方ながら正當だとはいはれない〕。

One of you must be in the wrong.

〔必ず一方がいけないに相違ない〕。

(6) 普通名詞を無形名詞の意味に變化す。

こんな例も澤山ある。二三の例を擧げると

The pen is mighter than the sword.

〔筆の力は劍の力より强し〕。

これは文の力と武力といふ Abstract sense (無形的の意味) に Common Noun (普通名詞) の pen や sword が遣はれて居るのである。

He felt the patriot rise within his breast.

〔彼は胸に愛國の志が起つた樣に思つた〕。

これも普通名詞の patriot が無形的の patriotic spirit とか patriotic feeling の意に用ゐられて居るのである。

此外 the eye (眼) が sight (視力) の意に、the ear (耳)

rīght (らィト) 正當。 wrŏng (ろング) 不正。 pĕn (ペン) ペン先。 mīght'ĕr (まィタ) 一層力强い。 swōrd (スウォード) 劍。 fĕlt (フェルト) 感じた。 pā'trĭ-ot (ペィトリオト) 愛國。 rīse (ライズ) 起る。 wĭth-in' (ウィずィン)……の內に。 brĕast (ブれスト) 胸。 eye (アィ)。 sīght (さィト)。 ēar (イーァ)。

が hearing (聽力) の意に用ゐられるなど、其例は頗る澤山ある。

而してこの the も別段 the 其物には何等の意味がありまた名詞に附するのでもない。

(7) 固有名詞を普通名詞の意に變ず。

これは「初等英文法の話」の Proper Noun の所(第十頁)に述べた通り。

Japan is **the England** of East.

〔日本は東洋の英國なり〕。

この the England の意は the country like England の意で England それ自らを指すのでない、即ち英國の樣な國といふ國なる普通名詞と同じに用ゐられて居るのである。

此意味に固有名詞を用ゐるには不定冠詞を添える事もあり、また固有名詞を複數の形にして用ゐる事もある。前出(第 45 頁の)の一覽表中 I. の 10 に此事を擧げて置いた。

---

hēar'ing (ひーアリング)。

(8) 前置詞 by の後に附して measurement を示す。

These handkerchiefs are sold **by the dozen.**

〔此半巾は一ダース賣るのです〕。

Rice is sold **by the** *sho.*

〔米は一舛幾らといつて賣るのです〕。

こんな風に dozen, *sho* など度量衡を示す語と by の間には the を入れるので、すると「それだけを單位にして」どうする、其以外の方法では(例へば上例ならば此半巾を一枚賣りする事などは)しないといふ事を示すのである。

尤も此際の the にも矢張 the 其れ自身には何等の意味あるでもなく、また其次の名詞に何等の意味を附加するといふのでもなく、單に習慣上 by the 何々と measurement (度量衡) を示す語には the を附すといふまでの事である。

* * * * *

以上列記した the を附する名詞は總て單數の名詞にのみ限つて居た、(1) 以後どれ一つ複數の名詞に the を添えれば何うといふ説明はしなかつた。

---

hănd'kēr-chief (はンかチフ) ハンケチ。 are sōld (ソゥルド) 賣られる。 rīçe (らィス) 米。 shō 升。

では、複數の名詞に the は附けられぬかといへば、既に前に說明した通り、立派に附けられるのである。

複數の名詞に the を添えると、其用法は大抵上に示した (1) の用法、即ち particularize する事になるのである。

the dogs といへば「あの犬ども」「例の犬等」といふ意味に主として用ゐられる、即ち the は dogs を particularize して居る事に大抵なる。

(2) の whole class を示すには、其場合に說明した通り、複數ならば冠詞なしでよい、複數に the を附けては whole class を示す事にはならない。

(3) の習慣上 the を附すものに複數名詞は先づないと言つてよからう。

(4) の習慣上 the を附す固有名詞には、「複數の固有名詞には必ず the を附す」といふ、これは the の必ず入用な方の用法である。

(5) の熟語 (6) の無形的になるものは何れも單數のみて、複數の名詞はない。

(7) の固有名詞に the を附して普通名詞の樣な意味に遣ふのも、單數に限る事で、複數にすれば冠詞は不用になるのである。

(8) の by の後といふやつは、例へば

The handkerchiefs are sold by two dozons. など

measurement を示す語が複數であれば、two といつた風の數を示す形容詞が the に代る事になつて、the は不用になる。だからこの (8) の by の後の the といふ用法も單數名詞の場合に限つた事である。

尙ほ複數名詞の次に of 何々とそれを限定する句が附いて居ると、其名詞に the を附けねばならぬ。例へば

The lions of Africa. 〔アフリカの獅子〕。

The people of Chosen. 〔朝鮮の人々〕。

されば複數名詞に附ける the は普通は (1) の「あの」「この」「その」「例の」の意を示すものと of 何々の句に依て限定される場合と、先づこの二つと思つて差支なからうと思ふ。

* * * * *

以上名詞に附する the の用法の全部を述べたが、丁度 a が形容詞の數詞や代名詞の one に附屬する事があると同じ趣で、the もまた名詞以外の語に附屬する場合がないでもない。さる場合の the の用法をもこゝに述べて置かねばならぬ。

(9) Adjective (形容詞) に the を附けると複數の Noun

lī'ion (らィオン) 獅子。 Af'rī-cā (あフリカ)。 pē'ple (ぴーブル) 人々 (s が語尾になくとも複數なり)。 Chosen 朝鮮。 al'ways (おールウェズ) 常に。 hăp'pỹ (はピ) 幸福な。 hĕlp (ヘルプ) 助く。

と均しき意味を表はす事がある。

The rich should help the poor.

〔富者は貧民を救つてやらねばならぬ〕。

The learned are apt to despise the ignorant.

〔學者は往々にして無學の者を輕蔑す〕。

rich, poor, learned, ignorant は總て形容詞であるが、此際 the が附くと rich people, poor people, learned men, ignorant persons といふと同じ意味になつて居るのである。

形容詞はまた the を附けると Abstract Noun (無形名詞) の意味をあらはすものがある。

例——the good (善), the beautiful (美), the brave (勇), the patriotic (愛國心)。

(10) Superlative degree (最上級) の形容詞には必ず the を附す。これは「第二英文法の話」第百三十八頁に注意した通り

Taro is the tallest. 〔太郎は一番高い〕。

の如く必ず the を附けねばならぬのである。

(11) Comparative degree (比較級) の形容詞も、次に of the two といふ phrase (句) の附加する時は、其形容詞

poor (プーア) 貧乏な。 lēarn'ed (らーネド) 學問のある。 ig'nŏr-ant (いグノラント) 無學の。 are apt to……しがちなものだ、往々……する。

に the を附す。

Jiro is the taller of the two.

〔次郎は兩人の中で背が高い〕。

此事も「第二英文法の話」第百三十七頁に述べた通りである。

〔注意〕 比較級の形容詞でも of the two といふ phrase を遣はないで than を遣へば the を遣ふ必要はない。

Jiro is taller than Taro.

〔次郎は太郎より背が高い〕。

尙ほ次の文には of the two の phrase は明示してはないが、言外に其意を含み、言はゞこれが省略されて居るといふまでゞあるから、矢張 the を形容詞の前に附けるのである。

Which is the taller? 〔何らが高いか〕。

Jiro is the taller. 〔次郎が高い〕。

(12) 名詞の反覆を避くる爲め、其代りに用ゐる代名詞 one は形容詞ある際 a 又は an を用ゐねばならぬといつたが、時にこの the を用ゐる事もある。

This is the ripe one. 〔これは熟したのです〕。

These are the ripe ones.

こんな風に the の方は單複兩方に附ける事が出來る。 a の時は複數ならば some, any を用ゐねばならぬと比較し

て覺えて置かれるがよからう。

(13) 或る形容詞には必ず the を附す。詳しい事は形容詞の所即ち「第二英文法の話」に説明して置いたが、其主なものを擧げると

(1) the same, (2) the one.....the other, (3) double the..... (4) both, (5) the....., (6) all the....., (7) the first.....

斯んな風に形容詞の中には「冠詞は形容詞の前に置く」といふ規則を破つて、後に the を置くものもある。

* * * * *

以上一通り the の用法を説明し終つたと思ふ。例に依り次に其一般の規則を一覽表にして擧げて置かう。

Definite article の一覽表

I. 其意味——this, that, these, those の弱いもの

II. 其讀方——特に明かにいふには thē
普通は父音の前には thŭ と輕く短く、
母音の前には thī と輕く短く讀む。

III. 其用法——父音の前にも母音の前にも the を用ゐ、不定冠詞の時の a と an と區別する如き事はない。但し其讀方に區別ある事は上項の通り。
單數複數何れの名詞に附しても差支ない。
また名詞の如何なる種類のものにも附けられる。
其他の品詞には附ないが普通だが、形容詞と代名詞の或物には特に附ける事がある。
the を名詞に附けるのは

(1) 其名詞を perticularize する時
(2) 其名詞の whole class を示す時
(3) 或種の普通名詞に習慣上附屬する時
(4) 或種の固有名詞に習慣上附屬する時
(5) 或語に附屬して phrase となる時
(6) 普通名詞を無形的の意味に變ずる時
(7) 固有名詞を普通名詞の意味に變ずる時
(8) 前置詞 by の後にありて measurement を示す時

以上八つの場合に限る。尤も複數名詞に the を附するのは大抵此内の (1) の時と、of.....の句に依て限定される時と限る。

the はまた名詞以外のものに附く事がある。

(9) 形容詞に附いて複數の普通名詞又は無形名詞の代用をする。
(10) 最上級の形容詞に必ず附く。
(11) 比較級の形容詞には次に of the two なる phrase のある時又はこれが省略されて居ても意味上表はれて居る時に附く。
(12) 代名詞の反覆を避くる爲めの one, ones に形容詞のある時は the を附ける事もある。
(13) 或る形容詞、例へば same, one, other, both, all first, double 等は其前又は後に the を附ける。

IV. 其他の注意

1. 形容詞との比較——this, that, those, these は強い意味の the, the は弱い意味の this か that か these か those かであると言つてもよい。

2. 不定冠詞と同じく次の如き語が附いて居る時は更らに其上に the を附ける事は出來ない。

(1) a 及び an (2) my, our, your, his, her, its, their 等の所有格代名詞。(3) this, that, these, those 等の指示代名詞 (4) whose, what, which 等の疑問形容詞 (5) 所有格の名詞 (6) some, any, no, each, every, either, neither 等の形容詞。

3. 其位置は名詞の前に置き、名詞に形容詞附屬して居る時は更らに其前に附けるのであるが、形容詞の中で both the....., all the....., double the....., など the を特に後に置くものも少しはある。

第三

Article の省略

上に Article の性質及び其用法を説明したが、或種の名詞は其用ゐ様の如何により、上の用法に反して特に Article を omit (省略) する事がある。これは何故省略せねばならぬといふ理屈があつてさうなのではなく、唯習

慣上しかく省く事になつて居るといふまでゞあるから、理屈を離れて其省略さるゝ場合を一々覺え込むしか外に方法はない。この Article を省略する事を文法では Omission of article (冠詞の省略) といふのである。

次に其場合を一々列擧して説明して行かう。

1. Noun が Nominative of Address の時。

Nominative of Address (呼び掛けの主格) といふのは次の黒字の樣な用ゐ樣のもの即ち其文の主格たるものと同一人を表はす呼び掛けの語をいふので、此際は假令普通名詞の如き必ず何等かの冠詞を要するが規則になつて居るものでも、特にこれを附けないてよいのである。

Young man, why do you stand here idle?

〔若い人よ、何故君は此處にボンヤリしてムる〕。

Come, boys. Let us play base-ball.

〔皆來玉へ、ベイスボールをやらう〕。

---

yoŭng (ヤング) 若い。 stānd (スたンド) 立つ。 ĭdle (あィドル) 怠惰に。 sĭck (すィク) 病んで。 is in bĕd 寢て居る。 is fär ä-wāy′ (ファーラうェーィ) 遠方へ行つて居る。

2. Nounが自分の家族の人たるを示す時。

Mother is sick in bed, and **father** is far away. What shall I do? 〔お母アさんは病氣だしお父樣は遠方へ行つて留守だ、あゝどうしよう。

此文の mother といひ father といふは自分の父母即ち我が家族の人を指すのであるから、單數の普通名詞たるに拘らず、特に the も a もいらないのである。尤もこれらに my mother, my father の如く my の如き所有格の代名詞を附する事は差支ないが、the や a を附する事は絶對にいけないのである。

尤もこれは自分の家族の人を示す場合に限るのだから若し他人の mother であり father であれば

the mother of Jiro is sick, and the father is far away.

の樣に the を附けるか、

Jirō's mother is sick, and *his* father is far away.

の如く説明に所有格の名詞又は代名詞を附けねばならぬのである。

---

3. Nounが Appositive Modifier か Complement として用ゐられ、家族間の關係または官職を示す時。

鳥渡これだけを讀むと大變六つかしい樣だが

Masatsura, **son** of Masashige, fell at Shijonawate.

〔正成の息正行は四條畷に戰死せり〕。

此文に於て son of Masashige なる句は Masatsura なる主格と Apposition (同格) であつて、これを説明する爲めに挿まれたるもの、即ち Modifier (説明語) である。だから本來ならば son は單數の普通名詞だから冠詞を附けねばならぬ規則であるに係らず、特にこれを省略する事になつて居るので、これを the son の如くする事はいけないのである。

Butei, **Emperor** of China, was once presented with an elephant.

〔支那の皇帝武帝が或時象の献上を受けた〕。

これも同樣 Emperor of China は主格の Butei と Appositive Modifier (同格の説明語) だから、Emperor に冠詞

Appositive modofier の事、Complement の事は、總て「第三英文法の話」に詳しく説明してある。

ap·pŏs'ĭ-tĭve (アポズィティヴ)。 mŏd'ĭ-fī-ĕr (もディファイア)。 cŏm'ple-ment (こムプリメント)。 fĕll (フェル) 斃れた。 ap·po-sĭ'tion (アポズィシャン)。 was pre-sĕnt'ed (プリゼンテド) 送られた。 ĕl'e-phănt (えリファント) 象。

を附ける必要ないのである。

併しながらこれは皆 son といひ Emperor といひ、何れも家族間の關係(親とか子とか、叔父とか甥とかいふ類の語をいふ)又は官職の名(皇帝とか大臣とか知事などいふ類の語)であるからで、若しかこれが其以外のもの、例へば bookとか house などいふものであれば假令 Appositive Modifier であつても、必ず a, an なり the の何れかを附けねばならぬのである。

He was **uncle** to the king.

〔彼は王樣には其叔父に當る人であつた〕。

こゝの uncle to the king は he なる主語の意味が單に動詞の was だけでは明瞭しない爲めに添えた Complement (補足語)である。そして uncle なる語は家族間の關係を示す語であるから、單數の普通名詞たるに係らず何等の冠詞をも附けないのである。

He was appointed **Governor** of Tokyo-fu.

〔彼は東京府知事に任ぜられた〕。

これも Governor of Tokyo-fu なる句は was appointed なる動詞の Complement (補足語)であつて、且つ官職の名であるから、Governor に何等の冠詞をも附する事はいら

ŭn'cle (あンクル) 叔父。 was ap·point'ed (アぽインテド) 任ぜられた。 Gŏv'ērn-ōr (がヴァナ) 知事。 pro-fĕs'sor (プロふェサ) 教授。 lit'ēr-a-ture (りタラチァ) 文學。

ないのである。

尙ほ次の各例は一々其理由を說明しないが、矢張以上の何れかと同一の理由で冠詞が黑字で示した語の前に省略されて居るのである。其詳しい理由は諸君自らの研究に任す爲め、わざと說明せずに置く。

He is **professor** of Enghieh literature.

〔彼は英文學の教授である〕。

Washington was elected **president**.

〔ワシントンは大統領に選擧された〕。

About this time Nelson was made **colonel** of marines.

〔此頃ネルスンは海軍大佐になつた〕。

Taro, **brother** of jiro, came yesterday.

〔次郎の兄弟の太郎が昨日來ました〕。

兎に角、一方では家族間の關係を示す語か、官職名の語であつて、他方にはまた文の同格說明語か補足語たるもの……といつた風に兩方の條件を具備して居るものは總て冠詞を省くと覺えて置けばよい。併しながら其一方の條件を欠いたものには無論 the なり a, an なりを添

Wash'ing-ton (うォシンゲトン) 米國第一代・大統領 wąs-lĕct'ed (イれクテド) 選擧された。 a-bout'this time 此頃。 Nĕl'son (ねルスン) 英國の有名なる海軍大將。 wąs mādc……にされた。 colonel (cŏr'nel かーネル) 大佐。 mā-rīne' (マりーン) 海軍の。 kind (かィンド) 種類、 sôrt (ソート) 種類。 plĕn'ty (プれンティ) băt (バット) 蝙蝠。 rō'dent (ろウデント) 嚙齧類。

えねばならぬのである。

4. a kind of, a sort of, plenty of 等の句の次にある Noun.

a kind of……も a sort of……も譯して「一種の……」といふ。plenty of……は「澤山の……」である。これ等の次に來る Noun は總て the なり a, an を取るには及ばないといふのである。

The bat is a kind of **rodent**.

〔蝙蝠は一種の嚙齒類である〕。

His brother is quite a different sort of **man**.

〔彼の兄は全く一風變つた人だ〕。

例外 所てこの a kind of や a sort of が疑問文や感歎文中に遣はれて居る時は、矢張其次の名詞に Indefinte Article の a なり an を添えねばならぬのである。

What a strange kind of a **rodent** the bat is!

〔蝙蝠は本當に妙な種類の嚙齒類だ〕……感歎文

What sort of a **man** is his brother?

〔彼の兄はどんな風の人か〕……疑問文

quite (クウィト) 全く。dif'fer-ent (ディファレント) 異れる。school (スクール)。church (チャーチ)。

5. School, church 等の語が其本來の目的として用ゐらるゝ時。

例へば I am going to **school**. 〔私は學校へ行く〕。といふ文中の school は「學校」ではあるが、これを「稽古」と譯しても差支ない。即ちこゝの school は學校本來の目的——學校は何の爲めに建てゝあるかといへば、即ち稽古する爲めである。即ち「稽古」といふ事が學校本來の目的である。所で今も言つた通り上文の school はこの本來の目的たる稽古をしに行くといふ意味を表はして居る樣に用ゐられて居るのであるから、此規則に從ひ冠詞なくともよいのである。

これに反し、同じ school でも

The school was built last year.

〔學校は去年建つた〕。

といふ文の school は「稽古」と譯しかへる事は出來ない即ちこゝの school は「校舍」の意で、本來の目的たる稽古の方ではない。だから此方には冠詞の the が入用なのである。

was built (ウォズビルト) 建てられた。last year (らストいィーア) 去年。be-gins' (ビギンズ) 始まる。o'clock' (オクろック) 時。left (leave の過去) 去つた、退學した。month (もンス) 月。stand'ing (スたンディンク) 立てる。pass'ing (ぱッスィインク) 通つて。through (スるー) 通じて。dis-trict' (ディストリクト) 地方。

更らに別の例を擧げると

School begins at 8 o'clock.

〔學校は八時に始まる〕。

He goes to school every day.

〔彼は毎日學校へ行く〕。

She left school last month.

〔彼女は先月學校を下がつた〕。

等の school はこれを稽古と譯してもよい。即ち本來の目的として用ゐられて居るから冠詞がない。所で

Going about one mile, I saw a school standing there.

〔一哩許り行くと學校が建つて居た〕。

When I was passing through that district, I went to the school.

〔其地方を方々通つて行くと學校の所へ出た〕。

He lives opposite the school.

〔彼は學校の向ひに住む〕。

此等は學校の建物を指すのだから school に冠詞がいるのである。

斯んな風に本來の目的を示すか否に依て、冠詞の要否

Sūn'day (さンデ) 日曜日。 mīrk'et (まーケト) 市場,' Chānge (ちェインヂ) は ex-change (エクスちェインヂ) の略字で取引所の意。 vĭs'it-ed (ゞィズィテド) 行つた。

二樣にある語は他にも澤山ある。其主なるものを次に列擧すると

(1) **School, college,**

(2) **Church,** He goes to *church* every Sunday. 〔彼は毎日曜日に教會へ行く——禮拜に〕。

(3) **Market,'Change.** She went to *market*. 〔彼女は市場へ行た——買物に〕。

(4) **prison, jail.** They were thrown into *prison*. 〔彼等は牢屋に投入られた——禁錮の爲に〕。

(5) **hospital.** The injured man was carried to *hospital*. 〔負傷者は病院へ送られた——治療を受けに〕

(6) **home.** Is he *at home?* 〔彼は在宅か〕。

(7) **Court.** I've never gone *to court*. 〔僕は裁判所へ出た事がない——裁判を受けに〕。

(8) **bed.** I *go to bed* at ten. 〔僕は十時に寢る〕。

(9) **table, breakfast, dinner, supper.** 等 We are *at table*. 〔食事中だ〕。 *Dinner* is ready. 〔御飯はよろしうございます〕。

(10) **hand.** Your letter is just *to hand*. 〔貴書只今受取申候〕。

(11) **town.** He went *to town*. 〔彼は倫敦へ行つた〕。

I passed by *the church*.

〔私は教會の側を通行した〕。

She visited *the market*.

〔彼女は市場を見物に行た〕。

There is *a prison* on the top of the hill. 〔岳の上に牢屋がある〕。

Is there *a hospital* in this village?

〔此村に病院があるか〕。

I have *no home*. 〔僕は宿無しだ〕。

〔no=not a〕

He went to *the court*. 〔彼は裁判所へ行つた—— 傍聽か何か他の用事で〕。

A cat is under *the bed*. 〔猫が寢台の下に居る〕。

He put the cups on *the table*. 〔コップを食卓に乘せた〕

The dinner was poor. 〔食事は粗末だつた〕

We have two *hands*. 〔手は二本ある〕。

A river runs through *the town*.

〔川が町を貫流して居る〕。

tā'ble (ティブル) 食卓。 brĕak'fast (ブれックファスト) 朝飯。 dĭn'nĕr (ディナ) 正餐。 sŭp'pĕr (さパ) 晩餐。 rĕad'ĭ (れディ) 準備す。 cŭp (カップ) 杯。 poor (プーア) 粗末な。 hănd (はンド) 手。 town (たゥン) 都邑。 rŭn(らン)流る。 thrōwn (スろゥン) 投げられ。 prĭs'on (プリズン) 牢屋。 jāil (ぢェイル) 牢屋。 hŏs'pi-tăl (ほスピタル) 病院。 in'jured (いンヂュアド) 傷いたる。 was căr'ri d (かリド) 運ばれた。 vĭl'lage (ゞレヂ) 村hōme (ほゥム) 家、家庭。 no=not a. cōurt (こゥアト) 宮廷と法廷と二つ意味がある。 bĕd(ベッド) 寢臺。

(12) **railway, railroad.** Now-a-days people mostly travel *by railway.* 〔近頃人は大抵汽車で旅する〕

(13) **train** They were sent *by train.* 〔汽車で送られた〕。

(14) **land, sea.** I will go *by land* not *by sea.* 〔海路でなく陸路を行くつもりです〕。

(15) **foot, horse-back, jinrikisha, bicycle.** 等總ての乘物.

It will take half an hour *on foot,* and ten minutes *on* (又 *by*) *bicycle.*

〔歩るけば半時間、自轉車では十分かゝります〕。

A railroad was laid.

〔鐵道が布設された〕。

A train ran off the rails.

〔汽車が脱線した〕。

Whales do not live *on the land,* they live *in the sea.* 〔鯨は陸に棲まぬ、海に棲む〕。

There are five toes on *each foot.*

〔脚には五本づゝ趾がある〕

Have you *a bicycle?*

〔自轉車をお持ちですか〕。

以上の外にもまだ幾らもあらうが、大抵皆似寄りのものである。

斯くな風に本來の目的を示す用法には一切冠詞なし、さうでなく語其儘の用法には冠詞又は其代用語句を附けねばならぬのである。

本來の目的を示す用法には上の例に見らるゝ通り前置詞其他の語を伴つて一つの熟語風のものになつて居る事が多いので、其伴ふ熟語は大抵此語にはこれと定まつて居るし、中にはまた伴ふ前置詞を別にするが爲めに意味

rāil'way (れィルウェ)鐵道。 rāil'road(れィルロド)鐵道。英國では多く前者を米國では後者を用ふ。 now'-ā-days (なゥアデズ) 此頃。 mōst'lȳ (もゥストリ) 大抵。 trăv'el (トらヴル) 旅行す。 was lāid (レィド lay の過去分詞) 布設された。 trāin (トれィン) 汽車。 răn ŏf' (らンノフ) 脱線した。 lānd (ランド) 陸。 sēa (スィー) 海。 whāle (ホエイル) 鯨。 live (リヴ) 住む。 fōōt (フット) 脚。 hô'se'bāck (ほースバク) 馬の背。 jinrikisha 人力車。 bī'çȳ-cle (ばィスィクル) 自轉車。 tōe (トーゥ) 足の指。

hăl'f ăn hour (はーフ.アンナゥァ) 半時間。 min'ute (みニト) 分。 ăt-tĕnd' (アテンド) 出席す。 lēave (リーヴ) 去る。

を別にするもの (court など其一例) もあるから、序ながら次に以上の語に伴ふ前置詞の類を一通り示して置かう。

(1) **School, college,** at school (稽古中), go to school (登校する), attend school (在學する), leave school (退學する), come home from school (學校より歸宅す), school has begun (始業になつた) at college 等。collegeも同じである。

(2) **Church.** go to church (參詣する), church is over. (おつとめが濟んだ) 等。

(3) **Market, 'Change.** in market (市場で賣買中), go to market (買物に行く), on, Change (取引所で取引中) 等

(4) **Prison, jail.** to prison (牢屋へ), in prison (牢屋に), in jail (牢屋に) 等。

(5) **Hospital.** in hospital (入院中), send to hospital (送院する) 等。

(6) **home.** at home (在宅)。

この home といふ語に注意すべき事は、此語は此儘で形容詞にも副詞にもなる。例へば

go home (歸る), come home (歸る), get home (歸る), send home (歸へす), write home (家へ手紙をやる) 等の home は何れも go, come 等の動詞を説明する副詞で。

way home (歸途) の home は way なる名詞を説明する形容詞である。よく此等の home を名詞と誤る人があるから注意して置く。

(7) **Court.** go to court (訴訟する), at court (宮中で), in court (法廷で) 等。

(8) **Bed.** go to bed (寢る), retire to bed (寢所に入る), lie in bed (横臥する), get out of bed (起きる), is still in bed (まだ寢て居る) 等。

(9) **Table.** at table (食事中)。

Breakfast, dinner, supper. breakfast (dinner, supper) is ready (朝、晝、夕) の支度が出來た), before——(——飯前), after——(——飯後), at——(——飯の時に), for——(——飯に), sit down to——(——飯をたべる) 等。

(10) **Hand.** at hand (手近に), on hand (有合の), in hand (實行の),

sĕnd (センド) 送る。 re-tīre' (リたィア) 退く。 lie (らィ) 横はる。 stil' (スてィル) まだ。

hand (手許に), out of hand (すぐに), to take a pen in hand (筆を持つ) 等。

(11) **Town.** in town (倫敦で), go to town (出京す), leave town (退京す) 等

これは前にもいふ通り、英國で London (倫敦) の事を town (冠詞なし) といひ、これに對し、London 以外の地方を the country (常に the を附す) といふので in the country (地方で), go into the country (地方に行く) 等の句あり。

(12) **railway, railroad.** by railway (汽車で) 等.

(13) **train.** by train (汽車で) 等。

(14) **land, sea.** by land (陸路を), by sea (海路を), go to sea (水夫になる), at sea (海上で) 〔併し on や in は on the sea (海上を) in the sea (水中に) の如く the を附す〕。 by water (水路を) ともいふ。

(15) **Foot, horseback, jinrikisha, bicycle** 等總ての乘物。 on foot (あるいて), on horseback (馬上で), on (又 by, どちらを用ゐてもよい、同じ意味) jinrikisha (人力車で), on (又 by) bicycle (自轉車で), by steamer (汽船で、此際は on は遣はぬ)。

以上の如きを熟語といふ。此外熟語には大抵冠詞を省くを通例とする。序だから尙ほ他の熟語を少々示して置かう。

On earth (地球上) 單に地球の時は the earth と the を附すべき事は前に述べた通り。この on earth といふ熟語は in the world といふ熟語と同意義に遣つて、單に文章の意味を强める役をする。

Who $\left\{\begin{matrix}\text{in the world}\\ \text{on earth}\end{matrix}\right\}$ are you? 〔全體君は誰れだ〕 in the world は「世界に於て」on earth は「地球上」といふ意味でなく、此際は單に Who are you? といふ文の勢を强めるだけの役をして居るので「全體」とでも譯したらいゝ位のものである。

Lŏn'don (ろンドン)。 coŭn'trȳ (かントリ)。 stēam'ēr (スてィーマ) 汽船。 ĕarth (アース) 地球。 wŏrld (うァールド) 世界。

above ground (地上), under ground (地中).

on board ship (船中), on shore (陸上).

out of doors (戸外), within doors (戸內), up stairs (階上), down stairs (階下).

by name (名は), by trade (貿易で), in fact (實際は), in truth (實際は).

by day (日中), by night (夜中), at night (夜に), at day-break (夜明けに), at sunset (日沒時に), before sunrise (日出前に), at noon (正午に), at midnight (夜半に).

in trouble (困つて), in debt (借金して).

on demand (要求次第), at sight (一覽の上), after sight (一覽の後), in sight (見える所に), out of sight (見えない所に), at first sight (一目見て).

of opinion (意見で).

in case (場合で), on condition (約束で).

by chance (偶々), by accident (偶々), by mistake (間違ひで)。併し「間違をする」は make *a* mistake。際限がないから此位にして置く。これだけでも知つて置けば、實際上非常に便利だらうと思ふ。

6. Verb と結附いて一つの動詞句となつて居る時。

例へば

The fair is to take place to-morrow.

〔定期市は明日開かるゝ筈だ〕。

ȧ-bŏve' (アばヴ) 上に。 ground (グらウンド) 地面。 ŭn'dĕr (あンダ) 下。 bôard (ボード)。 shōre (ショウア) 海岸。 with-ĭn' (ウィずィン) の內に。 stȧirs (スてァズ)。 trāde (トれィド)。 făct (ファクト)。 truth (トるース)。 dāy'-brēāk (てィブレク)。 sŭn'set (さンセト)。 sŭn'rise (さンライズ)。 mĭd'night (みドナイト)。 troŭb'le (トらブル)。 dĕbt (デット)。 de-mānd' (ディまンド)。 sīght (さイト)。 o-pĭn'ion (オぴニァン) 意見。 con-dĭ'tion (コンてィシァン)。 chȧnce (ちァンス)。 ăc'çi-dent (あクスィデント)。 mis-tāke' (ミスてィク)。

の take place はこれで一つの verb の意味を表はして居る句である。だから place なる名詞には此規則により冠詞を附けないでよいのである。こんな例は幾らもある。尙ほ五つ六つ擧げて見よう。

The ship **cast anchor** yesterday.

〔船は昨日投錨した〕。

The ship **weighed anchor** yesterday.

〔船は昨日拔錨した〕。

cast anchor = arrived, weighed anchor = started で何れも動詞の意味の句だから、名詞の anchor (錨) に冠詞がいらないのである。

The plant didn't **take root**.

〔木が植ゑ附かない〕。

His sister **keeps house** for him.

〔姉が彼の代りに家政を取締る〕。

The soldiers **took aim** and fired.

〔兵士が狙ひをつけて發砲した〕。

They were forbidden to **set foot** in the house.

〔彼等は戸内に足を入れる事を禁じられて居る〕。

fâir (フェイア) 定期に開く市場。 cast (カスト) 投げる。 ăn'chŏr (あンカ) 錨。 weigh (ウェーイ) 拔く。 ām (エーイム) 狙ひ。 fīre (ファイア) 發砲す。 fŏr-bĭd'den (フォビドン) 禁じて。 sĕt (セット) 置く、入れる。

尙ほ序だから主なる此類の動詞句を擧げて見よう。

do good (...の爲めになる), **do justice** (風味する), 等。併し **do a kindness** (親切をする) には冠詞がいる。

make love to (.....を戀ふ), **make war upon** (.....と戰ふ), **make way** (道をよける), **make head against** (...に抵抗す), **make haste** (急ぐ), **make room** (席を讓る、退く), **make sail** (帆を揚す), **make suit to** (...に求婚す) 等。併し **make a mistake** (間違ひをする) には冠詞が入用

take place (起る), **take part in** (...に仲間入りする), **take part with** (.....と仲間になる), **take care** (用心する), **take heed** (用心する), **take breath** (息をつぐ), **take fire** (燃える), **take heart** (元氣づく), **take cold** (風邪ひく), **take hold of** (つかまへる), **take oath** (誓を立つ), **take advantage of** (.....を利用す), **take interest in** (面白味がある), **take pleasure in** (嘉賞す), **take delight in** (喜ぶ), **take refuge** (逃げる), **take effect** (功を奏す), **take shelter** (隱れる), **take root** (根ざす, **strike root** ともいふ) **take horse** (馬を驅る), **take aim** (狙ふ) 等。

give way (避ける), **give ear** (注聽す), **give chase** (追ふ), **give heed** (注意す), **give** (又 **pay**) **attention** (注意す), **call attention** (注意をひく), **give battle** (攻戰す) 等。

catch sight of (...を見附ける), **lose sight of** (...を見失ふ) 等。

send word (ことづけする), **bring word** (ことづけする) 等。

part company (仲間を脫す), **keep company** (仲間を組む) 等。

keep house (家事を取締る), **keep school** (學校を管理す、併しこれには不定冠詞 a を附ける事もある), **keep store** (開店する), **shut up shop** (閉店する)。

jūs'tĭçe (ヂャスティス)。 lŏve (ラヴ)。 wăr (ウォー)。 hāste (ヘイスト)。 sāil (セイル)。 sūit (シュート)。 brĕath (ブレス)。 heärt (ハート)。 ōath (オーウス)。 in'tĕr-est (いンタレスト)。 ăd-văn'tăge (アドヴァンテヂ)。 pleaş'ure (プレヂュア)。 de-līght' (ディライト)。 re-fūge' (リふューヂ)。 shĕl'tĕr (セルタ)。 at-tĕn'tion (アテンシャン)。 hĕed (ヘード)。 băt'tle (バトル)。 cŏm'pa-nỹ (こムパニ)。

go up stairs (二階に昇る), come down stairs (下に降りる), keep within doors (内に居る), go out of doors (外に出る) 等。

cast anchor (投錨する), weigh anchor (拔錨する) 等。

go on shore (上陸する、go ashore ともいふ), go on board (乘船する、go aboard ともいふ) 等。

sit in judgement on (……を批難する), put to death (死刑に處す), condemn to death (死刑の宣告す), suffer death (死刑に處せらる) 等。

beg leave (詫びる), beg pardon (詫びる、又 beg your pardon などともいふ) 等。

bring to light (世に示す), come to light (現はれる) 等。

take up arms (戰を始む).

follow suit (眞似る).

set sail (出帆す), set foot (足を入れる),

shake hands (握手す).

be friends (仲よくする), make friend (仲よくする) 等。 先づ斯んな事にして置かう。 斯んな熟語は幾らもある。

7. 二つの名詞が對(つい)の句をして居る時。

例へば

Master and servant were equally surprised.

〔主從共に驚いた〕。

Father and son were begging.

〔親子諸共乞食して居た〕。

à-bōard' (アボゥド)。 jŭdge'ment (ヂァヂメント)。 con-dĕm' (コンデム)。 sŭf'fĕr (サファ)。 pär'don (パードン)。 ärms (あームズ) 武器。 shāke (セイク) 振る。

の如き Subject (主語) が二つの名詞で對の句になつて居るもの。

He is neither sage nor idiot.

〔彼は聖人でも馬鹿でもない〕。

They are husband and wife.

〔二人は夫婦である〕。

の如き Complement (補語) であつても、また Object (客語), modifier (說明語) であつても何でもよい。 二つの名詞を對立して遣つたものは、 總て冠詞を省いてよいのである。この對になる名詞には同じ語のもあれば、 別の語のもある。

主なるそんな句を次に並べて見よう。

day by day, day after day (毎日), night after night (毎晩), year after year (毎年), from year to year (毎年毎年、今年も來年も), week in week out (毎週毎週) の類。

face to face (面會す), word for word (語を逐ふて、一語一語に), hand to hand (相接して), man to man (一人一人、それからそれへと), hand over hand (手を組んで), arm in arm (腕を組んで、腕をつなぎ合はして), step for step (一歩一歩とだんだん), side by side (並んで), soldier after soldier (どの兵士もどの兵士も來るもの悉く) の類。

tree after tree (木は一本一本と), from flower to flower (あちらの花からこちらの花へと), from place to piece (方々へ), from side to side

más'tĕr (まスタ) 主人。 sĕr'vănt (さーヴァント) 召仕。 ē'quăl-lĭ (いークォリ) 等しく。 wĕre sŭr-prīsed' (サプライズド) 驚いた。 bĕg'gĭng (ベギング) 乞食して。 sāge (セイヂ) 聖人。 id'i-ot (いディオト) 愚人。

(方々に), from town to town (町といふ町をあちこちと), from door to door (戸毎に), from head to foot (頭の先から足の端まで), from east to west (東から西へ), from morning till night (朝から晩まで), live from hand to mouth (其日暮し), from beginning to end (始めから終まで)

book in hand (書を手にして), pencil in hand (鉛筆を手にして) sword in hand (劍を握つて), cigar in mouth (煙草をくはへて), hat in hand (帽を手にして), brother and sister (兄と妹), parent and child (親子), doctor and patient (醫者と病人), lawyer and client (辯護士と托訟者), debtor and creditor (債權者と債務者), pen and ink (ペンとインキ), pen and paper (ペンと紙), knife and fork (小刀と肉叉), bread and butter (バタ附パン), rider and horse (騎手と馬と), pursuer and pursued (原告と被告), east and west (東と西), principal and interest (元金と利息), heart and soul (心も魂も), town and country (都も田舍も), house or land (家か地か), beauty or beast (美人か鬼人か) の類。

8. 形容詞が名詞の如く用ゐられ且つ對に用ゐらるゝ時。

前に the の用法の所で、形容詞に定冠詞 the を附けると名詞の意味になるといふ事を說いたが、此種の形容詞が對に用ゐらるゝ時は、この the を省いてよいのである。

例へば rich and poor 〔貧乏も金持も〕。

young and old 〔若きも老いたるも〕。

be-gin'ning (ビギニング) 始め。 ĕnd (エンド) 終り。 pā'tient (ペイセント) 患者。 law'yĕr (ろーヤ) 法律家、辯護士。 cli'ĕnt (クらイエント) 訴訟依賴人。 pū-sū'ĕr (パしューア) 原告。 pūr-sū'd (パしュード) 被告。 prin'ci-pāl (プりンスィパル) 元金。 in'tĕr-est (いンタレスト) 利息。 härt (ハート) 主として情を司る心をいふ。(智と意を司る心は mind)。 soul (さゥル) 魂。

right and left 〔右と左〕。

high and low 〔高い所と低い所〕。

9. never, ever 等の次にある名詞。

例へば

Had *ever* **pupil** so patient a teacher? =Did a pupil ever have so patient a teacher?

〔あんな辛棒强い先生を持つ生徒が一人でもあつたらうか〕。

Never hero was more humane than Nelson. =No hero ever was more humane than Nelson.

〔ネルソン以上に慈悲深い英雄は一人もなかつた〕。

Never had **master** a more docile pupil. = No master ever had a more docile pupil.

〔あれ以上敎へ易しい生徒を得た先生は一人もない〕。

黑字で印刷してある語は本來ならば冠詞を要するのであるが、ever, never の次にあるから、これを省いて差支ないのである。

pā'tient (ペイセント) 忍耐强い。 hē'ro (ひーロ) 英雄。 hu-māne' (ヒュめイン) 慈悲深き。 Nĕl'son (ねルスン) 英國の海軍提督。 dōc'il (どスィル) 敎へ易い。

10. next, last が時を表はす語と伴ふ時。但し present (現在) の直ぐ前、または後といふ場合に限る。

例へば「來年」は next year で、「去年」は last year でよいが「自分が始めて東京へ來た其次の年」といふには the next year, 「一二年たつたら自分が學校を卒業し、其次の年には弟が卒業する」の「次の年」も矢張 the next year と the を附けねばならぬのである。斯んな風に今を標準にして「次」といふには單に next でよいが、過去又は未來の或時を標準として「其次」といふには the next 又は the following といはねばならぬのである。

last も其通り現在を標準にして「前」といふには冠詞はいらないが、「何々の前」と現在でない或時を標準として「其最後」といふ意味を表はす時は the last と the を附けねばならぬ。

唯一つ注意すべき事は last の方は next の例の様に「僕が東京へ始めて來た其前年」とか「一二年たつて僕は卒業し其前年に姉は卒業する」など過去又は未來を標準とし、其前といふ時には the last といふ事はいはない此時は the previous year とか the year before の様に別の語を

fōl' lōw-ing (ふォロイング) 次の。 prē' vi-oŭs (プリーヴィアス) 前の。

遣はねばならぬ。

即ち the last は「……の最後」といふ意味にのみ用ゐ、「其前」といふ意味には用ゐないのである。

二三の文例に依り上の説明を明にして置かう。

He was here *last* Monday. 〔此前の月曜日に此處に居た〕。	The meeting was held on *the last* Monday of March. 〔會は三月最後の月曜日に開かれた〕。
I returned *last* week. 〔自分は先週歸つた〕。	*The last* week of the month. 〔此月の最後の週〕。 He returned last week, but I returned *the previous* week. 〔彼は先週歸り、僕は其前週歸つた〕。
Let us go *next* Sunday. 〔次の日曜に行かう〕。 He will return *next* week. 〔彼は來週歸る〕。	We had gone *the next* Sunday. 〔我々は其次の日曜に行つた〕。 He had died the next week. 〔彼は其次の週に死んだ〕。

11. Most を「大概の」の意味に用ゐる時。

例へば

Most books are instructive.

〔大概の書物は教訓的だ〕。

Most boys like horses.

in-strŭct' ive (インストラクティヴ) 教訓的の。 in' sect (インセクト) 昆虫。 Vic-tō' rĭa (ヴィクトーリア)。 Ăl' fred (あルフレド)。 Lē' o (リーオ)。

〔大概の子供は馬が好きだ〕。

Most insects have wings.

〔大概の昆虫には翼がある〕。

同じ most でも其他の意味に用ゐられて居る時は the を附す。

It is **the most** useful of all.

〔それは皆の中で一番入用だ〕。

He has **the most** books of us all.

〔彼は私共皆の中で一番澤山本を持つて居る〕。

12. 尊稱又は家族間の關係を表はす語が、固有名詞の前にある時。

例、Queen Victoria (ヴィクトゥリア女王)
Prince Alfred (アルフレド親王)
Pope Leo X. (法王リーオ十世)
General Washington (總督ワシントン)
Captain Cook (クック大尉)
Professor Smith (スミス教授)
Dr. Swift (スウイフト博士)
Mr. James (ヂエイムズ氏)

これ等は皆尊稱が固有名詞に附いた例である。單に Queen, Prince だけてあれば the を要する事勿論である。

Uncle Tom (トム叔父) Aunt Mary (メィリ叔母)
Sister Ann (姉のアン) Cousin John (從兄のヂォン)

これ等は家族關係を示す語が固有名詞に附いた例。單に uncle, sister 等だけてあれば自分の uncle, sister 等でなくば the がいるは勿論てあの。

13. 書物の title (表題) や heading 見出し

日本でいへば「西郷隆盛の傳」とか「日本歴史」とかいふを **Life of Saigo Tokamori. History of Japan.** といふ事もある。本當なら始めに the を附けねばならぬのて、實際其通り附けてある書名も澤山ある。

また「例言」とか「序」とか「緒言」とかいつた風の見出しも **Preface, Introduction.** とのみいつて the を附けても附けなくともよい。

序ながらいつて置くが Reader (讀本) などて「第一課蟻」などいふには **Lesson I. The Ant.** といつた風に始めて ant の事をいふに普通 the を附ける。これも普通の規則とは反對(普通の規則に依れば始めて出る名詞には a か an を附けねばならぬ)して居るから注意せねばならぬ。

---

prē' face (プリ-フェス) 序。 in-tro-dŭc' tion (イントロだクシァン) 緒言。
Lĕs' son (れスン) 課。

14. 「....といふ」といふ意味の語の附く場合。

An ass is also called "donkey."

〔ass の事を donkey ともいふ〕。

本當なら donkey は單數の普通名詞だから a donkey となければならぬ所である。

He received his degree of Master of arts in America. 〔彼は米國でマスタオヴアーツといふ稱號を受けた〕。

He was greeted with the title of Emperor.

〔彼は帝王といふ稱號の待遇を受けた〕。

15. 名詞が「....の資格で」の意味に用ゐらるゝ as の次に來る時。

He has come as president.

〔彼は大統領の資格で來た〕。

His duty was to wait on the lady as page.

〔彼の役目は近侍の資格で貴女に仕へるのであつた〕。

ăss (アス) 驢馬。 dŏn'key (ドンキ) 驢馬。 de-grēe' (ディグリー) 學位。 măs'tĕr of arts (まスタオヴあーツ) 米國大學の學位、我が文學士位のもの。 grēet'ed (グリーテト) 待遇されて。 tī'tle (たィトル) 稱號。 prĕs'ī-dent (プれズィデント) 大統領。 wāit on (うェィトオン) 仕へる。 pāge (ペィジ) 近侍。

同じ as でも「.....といふ上では」といふ意味の時には、矢張り其次に來る名詞には a, an を附けねばならぬ。

As a statesman, he deserves high praise.

〔政事家といふ上では彼は大に賞贊さるに足る〕。

Ceasar, as an orator, was inferior to Cicero.

〔雄辯家といふ上ではスィーザはスィセロに劣つて居た〕。

この二つの as は邦語では、何れも「.....として」と譯して差支なく、從てよく混交する樣だが、後者は「としては」と更らに「は」を附けられるが、前者には「.....としては」と「は」を附ける事が出來ないから、この「は」を附け得ると否とを以て冠詞の要否を區別する栞とすればよからう。『邦語にはあれば冠詞あり、はなくば冠詞なし』と、斯う覺えて置いたらよからう。

* * * * *

以上冠詞を省略すべき、また省略して差支なき場合の總てを説明したつもりである。何分此等は理屈の上か

stātes'man (スてィツマン) 政事家。 de-şērve' (ディざーヴ).....を受くるに足る。 hīgh prāiṣe (はィプれィズ) 强き賞贊。 Cēa'şār (すィーザ) 羅馬の英雄。 ŏr'a-tor (おレタ) 雄辯家。 Çīç'e-ro (すィセロ) 羅馬の雄辯家。 in-fē'ri-or (インふィーリァ) 劣る。

ら割出して、斯く斯くの理由により冠詞を省くと論理的にはいかぬので、唯古來の習慣上、これ等の場合には冠詞を省略するといふに過ぎないのだから、理屈を離れて一々覺えるより仕方がない。從て隨分覺え悪くからうと思ふが、辛抱して追々に覺えてしまう樣心掛けらるゝがよからうと思ふ。

尙ほ二つ以上の名詞又は形容詞を並べて一つの文中に置く際冠詞の用法に就て注意すべき點があるから、それを併せてこゝに說明して置かうと思ふ。

16. 二個以上の名詞が同一の人又は物を表はす時は、冠詞は最初に一つだけ附ければよい。

例へば。

He was a soldier and poet.

〔彼は軍人で且つ詩人であつた〕。

The great soldier, scholar and poet is dead.

〔大軍人で學者で且詩人である人が死んだ〕。

An amiable and intelligent friend is invaluable.

〔やさしくてさかしい友は非常に尊いものだ〕。

sōl'dier (ソウルヂァ) 軍人。 pō'et (ポウェト) 詩人。 scholʼär (スカラ) 學者。 is dĕad (デト) 死んだ。 ā-mi'ā-ble (アミィアブル) やさしき。 in-tĕl'li-gent (インテリヂェント) さかしき。 in-văl'u-ā-ble (インヴァリュアブル) 尊き。

併し特にこの二つなり三つ以上を兼ねて居るといふ事を示す爲め强く表はしたい時には、一つ一つに冠詞を重ねる事もある。併し先づそんな例は極々稀れと思へばよい。

Raleigh was at the same time a great soldier, a great sailor, a great statesman, and a great writer. 〔ローリは同時に偉らい陸軍の軍人でもあり偉い海軍の軍人でもあり、大政事家でもあり、また大記者でもあつた〕。

He was not only the king, but the father of his people. 〔彼は啻に王たるのみならず、また民の父であつた〕。

17. 異りたる人又は物を表はす時は別々に冠詞を附す。但し省きても何等の疑なき時は後の冠詞を省くことを得。

例へば

The scholar and the poet are dead.

〔學者と詩人と(二人)が死んだ〕。

The Old and the New Testament.

〔舊約全書と新約全書〕。

Ra'lĕigh (ろーり)英國中世の人。 Tĕs'tā-ment (てスタメント) 聖書。

An amiable and an intelligent friend are worthy of regard. 〔やさしい友さかしい友は敬愛してよい〕。

以上は皆別々の物なり人が並べて一つの文中に用ゐられて居るのだから一々に冠詞を附けねばならぬのである。併し次の例の如く一々に冠詞を附けずとも、同一の人又は物と間違ふおそれがなくば、最初に冠詞を置くだけで其他は略して差支ない。

The husband, wife and children suffered extremely. 〔夫婦小供皆非常に苦んだ〕。

一々に the を附けずとも、同時に夫であり妻であり、また小供であるなどと誤解するおそれは萬々ないから、the は最初にだけ附けて、他は略したのである。

Once there lived a king and queen.

〔昔王様と王妃が居られた〕。

これも同様である。

18. 同一の人又は物を説明する形容詞が二つ以上ある時は最初にのみ冠詞を附す。

wŏrth'ȳ（ゥォーズィ）價値ある。 re-gärd'（リガード）取扱ふに。 sŭf'fĕred（サファド）苦んだ。 ex-trēme'lȳ（エクストリームリ）非常に。

A white and black flag. 〔白黒染分けの旗〕。
A white and a black flag. 〔白旗と黒旗〕。

A tall, old, wise man.
〔背の高い賢い老人、一人〕。
A tall, an old, and a wise man.
〔背の高い人と老人と賢者と都合三人〕。

斯んな風に同一の人又は物なれば、幾つ形容詞があつても最初に一つ冠詞を附けるだけでよいが、幾つかの形容詞が皆別々の人なり物を指す時には、一々に冠詞を添えねばならぬので、實は a tall *man*, an old *man*, and a wise man と一々に man を書くべきを、最後の一つの外は略したのだから、men と複數にするには及ばぬのである。上の flag の例も同様である。

19. 二個以上の形容詞が二個以上の別々の人又は物を別々に表はす時は (1) 各形容詞に冠詞を附して、名詞を單數にするか、(2) 最初の形容詞にのみ冠詞を附して、名詞は複數にするか、何れの形をとつてもよい。

だから上の例の。

A white and a black flag. は。

A white and black flags. としてもよい。

fifth（フィフス）第五の。 sixth（スィクス）第六の。

A tall, an old, and a wise man. は。

A tall, old, wise men. としてもよい。

The fifth and the sixth century.

=The fifth and sixth centuries.

〔第五世紀と第六世紀〕。

A French and a Dutch army.

=A French and Dutch armies.

〔佛軍と和蘭軍〕。

但しこれが

A French and Dutch army.

であれば 18 の規則に從ひ同一の army を二つの形容詞 French と Dutch が説明するものと解釋し「佛蘭の同盟軍」といふ事になる。

* * * * *

以上冠詞を省略し得べき場合の一覽表を次に示して本章を終る事としよう。

1. 呼び掛けの名詞。
2. 自分の家族を指す名詞。
3. 自分の家族間の關係を示す名詞及び官職名の語が同格又は補足語に用ゐられて居る時。
4. a kind of, a sort of, plenty of といふ句の次にある名詞。
   但し疑問文と感歎文には矢張り冠詞を要す。

çĕn'tu-rỹ (センテュリ) 世紀。 Dŭ'ch (だッチ) 和蘭の。

5. school, church 等の語が本來の目的を示す爲めに用ゐられて居る時—斯んな風の總て前置詞と名詞とで成立つ句は大抵冠詞を省く。
6. 名詞と動詞とで一つの動詞句を作る時。
7. 二つの名詞對の句をして居る時。
8. 二つの形容詞對の句をして名詞の樣な意味を表はす時。
9. never, ever の次にある名詞。
10. next, last が現在を標準として「前」「次」の意を示す時。
11. most が「大概の」の意を示す時。
12. 尊稱又は家族間の關係を示す語が固有名詞の前にある時。
13. 書物の標題や見出しに用ゐる名詞。
14. 「……といふ」といふ意味の附く樣に用ゐられたる名詞。
15. 「……の資格で」「……として」といふ意味の as の次に用ゐられたる名詞。

* * * * *

16. 二個以上の名詞が同一の人又は物を示す時は冠詞は最初の一つのみ附け、他は省略す。但特に意味を強める時は其各に附ける事もある。
17. 異れる人又は物を示す時は各々の名詞に冠詞を附ける。但し一々附けずとも疑はしくない時には最初にのみ冠詞を附けて他を略する。
18. 同一の人又は物を説明する二個以上の形容詞には最初にのみ冠詞を附けて他は略す。
19. 異れる人又は物を説明する二個以上の形容詞には (1) 各々に冠詞を附けて、名詞は單數にするか、(2) 最初の形容詞の前にのみ冠詞を附けて他を略し、名詞を複數にするか、何れでもよい。

第四

Article の位置

Article の position (位置) の事は、始めにざつと述べたが、こゝに細目に渉り今一度説明しようと思ふ。

前に述べた通り。

(1) Article は名詞の前に置く。

(2) 若し其名詞に形容詞が附く時は、幾つ形容詞が附いても、冠詞は其眞先に附く。

といふのが一般の通例である。併し次の形容詞の場合はこの通例以外即ち變則であるから注意せねばならぬ。

(3) all 及 both といふ形容詞には其次に the を附す。

例. *All* the students are here.

〔學生は悉くこゝに居る〕。

I know *both* the brothers.

〔兄弟二人ながら知つて居る〕。

all はまた副詞として用ゐらるゝ。其時は位置が變るが、意味は同じだ。

The students are *all* here.

(4) half (半分の) double (二倍の), treble (三倍の) といふ形容詞の時は、矢張其次に冠詞を置く。many といふ形容詞も時に其次に冠詞を置く。

例. half a mile (半哩), half an hour (半時間), half a dozen (半ダース), half the money (半金), half the distance (其距離の半分) の類。

double なり treble は上の half と置き替えれば、矢張り其通りである。

併しながら。

a mile and a half (一哩半), a full half-hour (丸々三十分)。

といつた風に他の語の附いて居る時は、通例前に冠詞を置く。

many a ship (澤山の船), many a boy (多くの小供) など many の次に a 又は an と單數の名詞とを置く事がある。これは many ships, many boys と普通にいふよりは many の意味が強くて、「どの船もどの船も澤山の船が」「どの小供もどの小供も多くの小供が」といつた風の意味になるのである。

(5) such といふ形容詞は矢張り冠詞の a, an を其次に置く。

例. such a boy (そんな小供), such an ox (そんな牛)。

doūb'le (だブル) 二倍の。 trĕb'le (トれブル) 三倍の。

dis'tance (ディスタンス) 距離。

(6) 形容詞の what を遣つた感歎文の時には、冠詞の a, an は矢張り其次に置く。

例. *What* a big dog it is !

〔本當に大きな犬だ〕。

What an old man he is !

〔大變な老人だねえ〕。

同じ感歎文でも how を遣つた時は、其 how は副詞で其文中の形容詞を説明するものだから、冠詞は更らに後になつて、其形容詞の次に入る。

How big a dog it is !

How old a man he is !

意味は what を遣つた文と全然同じである。

(7) so, as, how, however, too などを先に立つた形容詞は、冠詞を其次に置く。

例. We are having so *good* a time.

〔僕等は樂しんで居る〕。

I am having as *good* a time as you are.

〔僕も君達と同じに樂んで居る〕。

You can not know how *good* a time we are having. 〔僕等がどんなに樂んで居るか君には解らしない〕。

how-ŏv'ĕr (ハゥえヴァ) 併しながら。

However *good* a time you may be having, I am having a still better. 〔どんなに樂んで居るにしたつて、僕は更らに一層樂んで居るのさ〕。

It is too *good* a time to lose.

〔失くしてしまうに惜しい位樂しい時だ〕。

(8) no less, no better, no nobler といふ句は冠詞を次に置く。

例. He meant no less a person than himself.

〔彼は他ならぬ自分自らの事をいつて居るのだ〕。

(9) quite, rather といふ副詞は次に冠詞を置く。

例. That is quite a different thing.

〔それは全く別物だ〕。

I thought it rather a good one.

〔私はどつちかといへばいゝものだと思つた〕。

* * * * *

Article の位置に關する事項は斯んな事である。例により一覽表を次に示す。

通則 前に冠詞を置くもの。

lĕss (れス) は little と few との比較級。 little (又 few), less, least と變化す。 nō'blĕr (のゥブラ) 一層高尚な。 quite (くゥァイト) 全く。 răth'ĕr (らザ) 寧ろ。 dĭf'fĕr-ent (でィファレント) 異れる。

1. 名詞。
2. 形容詞＋名詞、幾つ形容詞があつても其眞先に冠詞を置く。

變則　後に冠詞を置くもの。

3. all the……, both the……
4. half a (又 the)……, double a (the)……, treble a (the)……, many a……
5. such a……
6. What＋a＋形容詞＋……！　感歎文。
   How＋形容詞＋a＋……！　同上。
7. so / as / how / however / too ＋形容詞＋a＋……
8. no less / no better / no nobler ＋a＋……＋than.
9. 副詞の quite / rather ＋a＋形容詞＋……,

……の所には名詞を置く。

第　五

Verb の性質

Article（冠詞）の話も大體終つたから、これから愈々英文法軍の本營ともいふべき Verb（動詞）の陣へ驀進するのである。尤も頁數の都合があるから、本篇にはほんの其先陣に切入るだけ、本當に牙城を屠つて大將の首級を擧ぐるは、引續き刊行する「第五英文法の話」に於てする覺悟である。

Verb（ヴァーヴ）。

何故 Verb（動詞）を英文法の本營だなど大きな事を言つて騒ぐかといへば、それは Verb が Nine Parts of Speech（九品詞）中で一番六つかしいからである。一番其規則が繁雜で一番解り悪いからであるが、一方にはまた Verb の使用を正確にするといふ事が、尤も肝要な事で、他の品詞の用法を誤つても或點までは、其推量もつき、それに依て間違ひをしてかす事も從て尠少であるが、動詞を一つ誤つたが最後、過去の叙述が現在又は未來に誤られ自分でした事を、他からされた事と誤解され、實際しないで唯若し爲たらどうと想像上の事を述べて居るつもりで居るに、他から本當に其事をしたものと誤られて大騒動が持ち上がるなどいふ事は、比々として起るであらうと思ふ。

されば Verb 篇の研究は English Grammar（英文法）研究中の最難事たると同時に、最肝要の事であると承知して尤も力を入れて研究して貰ひたいと思ふ。記者も其覺悟で、最も氣を入れて詳しき上にも詳しく解り易い上にも解り易く説明して行かうと思ふから。

I.　Verb の定義

先づ最初に Verb（動詞）とは如何なるものかといふ事を明にして置かねばならぬ。先づ日本文法書の數冊を開いて其説明を聞いて見よう。

〔甲書の説明〕「鳥飛ぶ」「花咲く」「書を讀む」「太郎は眠る」「馬は人を乘せて走り、牛は車を引きて歩む」の飛ぶ 咲く 讀む 眠る 乘せ 走り 引き 歩む は事物の動作をいふ語なり。此の如き語を動詞といふ。

斯んな風に 事の働きを示す語 即ち動詞と説明してある書物が非常に多い。少しく詳しく説いたものでは、

〔乙書の説明〕 動詞は事物の動作仕業等百般の狀態を示すものにして、實に文章中主格の名詞と共に最首要の詞なり。故に一の動詞を缺くときは全き文章をなさゞるを以て意義を通曉すること能はず。此故に説話文章を論ぜず、一の動詞を缺く時は全體をなさゞるものなりと知るべし。

此説明は Verb の定義を説くと同時に其性質を説いて動詞なき文はこれを文といふ事が出來ない事を示して居る。此事は既に「第三英文法の話」第七頁以下に Sentence（文）の主要部 と題して詳しく説明してある通り、日本語日本文も、英語英文も全然違ふ所はないのである。

更らに英文典を渉つて其説明を求めると、

〔A 書の説明〕 A verb is a word that states action or being.〔動詞は動作又は有樣を示す語なり〕。

これが普通の文法書の示す Verb の定義で、本書にも「初等英文法の話」の初めに此の通り説明して置いたのである。同じ事を結局指すのであるが少し言ひ方の違ふものには

〔B 書の説明〕 A Verb is a word for saying something about some person or thing.〔動詞とは人又は物に就きて或る事を言ふ爲めに用ゐる語をいふ〕。

つまり人間や其他の物や何か或る事をして居る、其して居るといふ事を示す語、即ち Verb だといふので、これは Nesfield の文典の示す定義である。他の書物には一層これを詳しく説明して

〔C 書の説明〕 The principal word in the Precicate is always a Verb, which is a word used for predicating——that is, for saying something about the Subject. A Verb may express *action* or *being*.〔叙語中の主なる語は常に動詞にて、動詞とは叙述をなす爲めに用ゐらるゝ語——即ち文の主語に就き何か或事を言ふ爲めに用ゐらるゝ語をいふ。動詞は動作又は有樣を示すに用ふ。

これは齊藤秀三郎氏の New Text Book of Enghish Grammar 中に示す定義である。

以上の説明に依り知り得らるゝ如く、日本語の動詞も

stāte（ステイト）述ふ。 ăc'tion（あクシヤン）動作。 be'ing（びーイング）有樣。 prin'çi-pal（プリンスイパル）主なる。 prĕd'i-cat-ing（プれディケティング）叙述する事。 ex-prĕss'（エクスプれス）表はす。 Tĕxt Bŏok（てクスト）教科書。

英語の Verb も其意味するものは全く同一のもので

(1) 文章中に缺くべからざる要素 これを缺けば文章といふ事が出來なくなるもの。

(2) 文の Subject (主語) に就き其 action (動作) 又は being (有樣) を述ぶる爲めに用ゐるもの。 これが即ち Verb (動詞) といふものであるといふ事になる。

だから

Flowers bloom. 〔花咲く〕。

I read a book. 〔我れ書を讀む〕。

Taro sleeps 〔太郎は眠る〕。

の如き Italic 體 (斜體) の文字の語即ち Subject の動作を示す black 體 (黑字體) の語即ち Predicate (叙語) は即ち Verb (動詞) と稱するもの (日本語では——を引いた語が主語で、═══を引いたものが叙語即ち動詞である)。

併しながら Verb とは上例の如き主語が何をして居るか 其してゐる事を示す語、即ち動作を示す語をいふの外、別に主語が何うなつて居るか、其有樣を示す語をも同じく動詞といふ事に注意せねばならぬ。即ち日本語の「……である」「……だ」「……なり」英語の be, is, am, are, was, were, been, being 等、總て be の動詞と名けらるゝもの、これらも矢張 Verb である事に注意せねばならぬ。

bloom (ブルーム) 咲く。

即ち

I am a boy. 〔私は小供です〕。

He was a student. 〔彼は學生でした〕。

等の黑字 am, was (═線を施すです, でした) も矢張動詞の一種で、I なり he なりの主語が如何なる有樣に居るか有樣即ち being を示して居るのである。

名を動詞又は働詞 (はたらくことば) といふ所から、動詞とは動作即ち働きを示す語とのみ誤解して、この being (有樣、狀態) を示す語を Verb の中でない樣に、よく初學者の中には誤解する人があるから、こゝに注意を促して置くのである。

形容詞の所に (「第二英文法の話」115 頁以下に) 其二用法を述べ、形容詞には

(1) the old man の old の如く其說明せんとする名詞の前にあつて直接これを說明するもの (名けて Attributive adjective 附屬形容詞) と、

(2) the man is old の old の如く、其說明せんとする名詞の後にあつて、或る語を距てゝ間接にこれを說明するもの (名けて Predicate Adjective 叙述形容詞) と二種ある事を述べ、更らに其 118 頁以下に (2) の Predicate adjective を詳說して、「或る語を距てゝ」といふ「或る語」とは如何なるものかを說き、それは

be（即ち前に擧げた通り be, is, am, are 等の總稱）, become, grow, get, go, keep, sit, stand, lie, look, seem など都合主なるもの十八語を列擧した。

此等の十八の語は即ち主語の being（有樣）を示す動詞と稱するものである。

尤も其内の多くは普通の意味に、例へば go が「行く」sit が「坐る」との意味に用ゐられて居れば、それは主語の action（動作）を示す方の動詞であるは無論の事である。上に所謂十八語は總て「……である」又は「……となる」など譯すべき意味に當る時を指すのである。

今言つた事を更らに一口に解り易くいへば

動詞の役目には二種ある。（1）主語の動作を示す（2）主語の有樣を示す。

而して普通の動詞は總て（1）の方に屬し、唯 Predicate adjective と Subject との間に挿まるゝ動詞（主語と間接の形容詞と中に挿まるゝ動詞）が（2）に屬するものである。

初學者には動詞といへば（1）の方ばかりと思つて、（2）の役目を知らぬものが澤山あるから注意せねばならぬ。

と、先づこれだけの事である。

II. Verb の分類

Verb（動詞）を分類する仕方は澤山ある。文法家によつて銘々色々の名をこしらへて、銘々色々の分類をやつて居る。併し其悉くを知る事は文法學者となる目的を以てする人の外には必要でないから、そんな無駄な事に讀者の頭腦を用ゐさせる事を止めて、次には多數の文法家の分類法を參酌し、一番合理的で且つ解り易いと思ふ分類を以て動詞の種類を說明して行かうと思ふ。

1. Finite Verb と Verbals

Verb は先づ大別して Finite Verb（治定動詞）と Verbals（類似動詞）との二つとする。

Finite Verb とは其伴ふ Subject（主語）の Person（人稱）及 Number（數）と同じ Person 及 Number を有する樣變化し得らるゝ Verb で、文の Predicate（叙語）として用ゐる事の出來るものをいふのである。

Verbals とは Subject の Person 及 Number の如何に係らず常に變化する事を得ない Verb で、それのみを以て文の Predicate を作る事の出來ぬものをいふのである。

Fī′nite（ふァイナイト）。Vĕrb-ăls（ヴァーバルズ）。Sĭn′gu-lăr（スィンギュラ）。Plū′răl（プリューラル）。

と、斯んな風に六つかしく説明した所で、失禮ながら多分お解りならない方や、誤解して居らるゝ方が多分にありはせぬかと案じられる。いでや例に依り、文例を示して解り易く説明して見よう。

例へば

I see a dog.

といふ文中の see は Finite Verb である。何故といふに此語は Subject の Person が First Person (第一人稱) の I と Second Person (第二人稱) の you に伴ふ時は see であるが、Third Person (第三人稱) の he, she, it に伴ふ時は sees と變化し、また Singuler Number (單數) の I, you, he, she, it の時は see 又は sees で、Plural Number (複數) の we, you, they に伴ふ時は……形は矢張り see の儘であるが、文法上いへば I see の see は第一人稱單數の see で We see の see は第一人稱複數の see, You see の see は第二人稱單數又は複數の see, He sees, She sees, It sees の sees は何れも第三人稱單數の see で They see の see は第三人稱複數の see といつた風に、其伴ふ主語の人稱なり數の如何と常に同一の人稱及び數の Verb であるといふのである。

Verb 中でも be の如きは第一人稱單數には am, 同複數には are, 第二人稱單數及び複數には are, 第三人稱單數には is, 複數には are と變化するから、一番よくわかる。併し形も常に see なら see の儘で變らなくとも差支ない。主語の人稱及び數の如何に從ひ、それと同一の人稱及び數の形であるといひ得る Verb は總て Finite Verb である。だから普通に Verb といふものは總てこの Finite Verb なのである。

では Verbals といふものはといふと、例へば

I am *to see.*

の to see の如きものである。これは am の方が Subject に伴ひ人稱及び數を變化するので、to see の方は Subject が you にならうが he にならうが、また they にならうが、それによつて第一人稱單數が、第二人稱單數に變化したとも、第三人稱單數になつたとも言ふ事の出來ないもの、即ちこの to see は Subject の Person 及び Number に伴つて其 Person なり Number を變化する事の出來ないもので、斯かる變化する事の出來ない Verb を總稱して Verbals (類似動詞) といふのである。

この Verbals の事は後篇に詳しく説明する豫定であるが、更らに小別して、これを (1) Infinitive (不定法), (2) Participle (分詞) 及び (3) Gerund (動名詞) の三種とする。何れも Finite Verb に to を附けるとか、語尾に ing を附けるとかいつた風の形をして、其役目は動詞でなく、形

容詞又は名詞の類の役目をするものが多いのである。

だからこの Verbals はもと Verb から出たものであるが、實は其性質は Verb でなく他の Parts of Speech（品詞）となつたもので、Verb の中に一所に説明しない方が却つて解りよくてよいと思ふ位のものである。

つまり廣い意味から見た Verb なるものは、其内に Finite Verb と Verbals と二種を含んで居るが、實際にいふ Verb とはこの Finite Verb をのみ主としていひ、Verbals は Verb 以外のものとして、別に置いてあるといつてもよいのである。

だから本書にも前にも鳥渡斷つた通り Verbals の事は Verb 篇の次に別に一篇を設けて「第五英文法の話」中に詳しく説く事とし、以下には主として Finite Verb（普通にいふ唯の Verb）をのみ説明するつもりである。

2. Principal Verb と Auxiliary Verb.

Finite Verb 俗に單に Verb といふものは、更らに分ちて Principal Verb（本動詞）と Auxiliary Verb（助動詞）との二つとする。例へば

What *do* you do with your mouth?

In-fin′i-tive（インふィニティヴ）。Pär′tĭ-çĭ-ple（パーティスィプル）。Gĕr′ŭnd（ヂェランド）。Prĭn′çĭ-pal（プリンスィパル）。aux-il′ia-rȳ（オーグズィリァリ）。

〔君は口で何をしますか〕。

Will you have a race with us?

〔一所に驅つてをしますか〕。

Have you seen a whale?

〔鯨を見た事がありますか〕。

などの中 Italic（斜體）の語即ち do, will, have 等は Auxiliary Verb（助動詞）で、同一の語でも black type（黑字）體で示した方の do や have 及び seen は Principal Verb（本動詞）である。

元來一つの文には必ず少くとも Verbが一つなくてはならぬのであるが、上の如く *do* you do だの *Will* you have だの、*Have* you see だのと二つ又は二つ以上の Verb が用ゐられて、それが相よつて一つの意味を表はす事もあるもので、斯かる際其中の主要な方の意味を表はす動詞の方を Principal Verb といひ、これを補ふ役目をして居る方の Verb を Auxiliary Verb と名を附けるのである。

だから一つの文中には單に Principal のみで Auxiliary のないもの It is a dog. の如き See the boy. の如きあり、また上の例文の如く各一つづゝあるものあり、また I *have been* scolded〔叱られて居た〕。の如き Principal は scolded で、これに have と been と二つの Auxiliary の添

rāçe（レイス）競走。whāle（ホェイル）鯨。scōld′ed（スこゥルデト）叱られて。

ふたものなど色々あるのである。

Auxiliary の事は矢張り後章に讓り「第五英文法の話」中に說く事とし、以下主として Principal の方のみに就き論ずる覺悟であるが、こゝに一つ注意すべき事は、元來「本動詞」といふ名稱は「助動詞」なるものゝこれに對照されるものがあるから始めて附けられる名で、It is a dog の如き、See the boy. の如き、助動詞なく單に本動詞のみより成る文にあつては、御叮嚀にこれを Principal Verb だの本動詞だのといはずとも、單に Verb (動詞) といへばよい筈で、從て俗に普通、Verb (動詞) といふはこの Principal Verb の事を示し、助動詞の添ふ場合にのみこれを區別する爲めに Principal だの「本」といふ名を冠する事となつて居る。

だから普通に Verb といふものは嚴重にいへば、本當の Verb 中の Finite Verb の其また中の Principal Verb をのみ指すもので、廣い意味にいふ Verb と俗に普通いふ Verb とは其廣狹の差が非常にある事を承知せねばならぬ。

---

3. Transitive Verb と Intransitive Verb

狹い意義の——即ち普通にいふ Verb (詳しくいへば Principal Verb といふべきもの) は更らにこれを小別して Transitive Verb (他動詞) と Intransitive Verb (自動詞) との二種とする。

日本の文法書を見ると

「火燃ゆ」「小供眠る」「馬が走る」の燃ゆ、眠る、走るの如き其主語自らが働くだけで、其働きの影響を他に及ぼさない動詞はこれを自動詞といひ。

また「私は本を讀む」「鳥餌を求む」「父子を愛す」の讀む、求む、愛すの如き主語の働きが他に及ぶものこれを他動詞といふ。

と斯うあるが、この日本文法の主語の働きの他に及ぶと及ぼさぬに依て、自動詞他動詞の區別が出來るといふ說明を此儘英文法にあてはめては、或る場合初學者には却て誤りを惹き易い事がないでもないと懸念される點がある。

例へば病氣だから「醫者を迎へる」といへば、其「迎へる」なる動詞は自他何れであるか。迎へるなる我れの動

Tràn′si-tive (トらンスィティヴ)。 Ĭn-tràn′si-tive (イントらンスィティヴ)。

作が醫者に及ぼして居るのだから、無論他働詞だと解釋される。また無論それに相違がないのである。併しながら此文を英譯して

I *send* for the doctor.

といへば、その send なる Verb は Transitive Verb かといふにさうでないのだ。英文法ではこゝの send は Intransitive Verb の中に入れるのである。何故といふに the doctor なる Object (客語) は直接 send なる Verb について居ないで、中に for なる Preposition (前置詞) あり、形の上ではこの Preposition の Object——文法上 Prepositional Object (前置詞の客語) といふものになつて居るのである。

御承知てもあらうが、この Object といふのは、いつでも Verb の Object たるものと、Preposition の Object たるものと二つあるのだ。上の如く Object の直ぐ前に Preposition があれば、それは Prepositional Object の方で、直ぐ Verb の次にあれば、それが Verb の Object であるといふのである。

だから文法上嚴重にいへば上の文の send は Object を持たぬ Verb である。所が

Prĕp.o-si' tion-ăl (プれポずィシェナル) 前置詞の。

Object を持つ Verb はこれを Transitive Verb (他動詞) といひ。

Object を持たぬ Verb は Intransitive Verb (自動詞) といふ。

といふのが英文法の定めて、從つて上の send は他動詞でなく、自動詞だと英文法では解釋さるゝのである。

I *go* to school. 〔私は學校に行く〕。

Look at my book. 〔私の書物を御覽なさい〕。

He *came* into the room. 〔部屋にはいつた〕。

此等の Verb も意味から考へると Object に動作を及ぼすのであるが、形の上から見れば Object の前に Ppeposition があつて、それ等は其 Preposition の Object であるのだから、Verb には Object なし、從て Intransitive Verb であるのである。

だから Verb の自他を區別するには日本語流に意味の上から考へないで、文章の形の上から見て、直接其 Verb に就く Object のあるなしに依て判斷するが、一番間違がなくてよからうと思ふ。尙ほこの Prepositional Object の事は、後節に更らに說明する覺悟である。

A. Transitive Verb と Object

上にも言ふ通り Transitive Verb（他動詞）に Object（客語、また目的語など譯す）は附きものである。Transitive Verb あれは必ず Object あり、客語なくば他動詞なるものは存在し能はずといつてもよい位である。

この Object の事は既に「第三英文法の話」第十六頁以下第二十一頁に詳しく説明してあるから、こゝに繰返さぬ、是非あれを今一度讀んで頂きたいと思ふ。

1. Object の性質、其定義

2. Double Object（二重客語）のこと。即ち Direct Object（直接客語）と Indirect Object（間接客語）のこと。

3. Object たり得る語の種類

此等は是非今一度「第三英文法の話」を讀んで、覺えて置いて頂きたい。

こゝに一つ同書に説明しなかつた事で、こゝに補つて置きたく思ふ事は、この Object の位置、即ち Object なるものは文章中の何處に置くが規則であるかといふ事の説明である。

普通 Object の位置は Verb の次である。

He *killd* a snake.　〔彼は蛇を殺した〕。

I *gave* him a book.　〔私は彼に本を遣つた〕。

など（Italic は他動詞で、black type は Object）總て他動詞の次に置かるゝが普通で、即ち日本語の總て他動詞の前に置くとは反對である。

所がこの Object の位置が、Object が Relative Pronoun（關係代名詞）か Interrogative Pronoun（疑問代名詞）の時、及び特に其 Object たる語を emphasize（意味を强めて言ふ）する時には、屢々 Verb の前に出す事があるのである。例へば

The man **whom** I saw yesterday has come back to-day.

〔私の昨日遭つた人は今日歸つて來ました〕。

この文中の whom は saw の Object で I saw *him* yesterday とあたりまへなら saw の次にあつて、him とすべき語であるを、此文と The man has come back to-day といふ文とを結附けて一文とする繋ぎの役をさせる爲めに him を whom とし、且つ其位置を Subject の I よりも Verb の saw よりも前に出したもので、實に Relative Pronoun が Object の時は其位置を Verbの前に出すといつた例證である。

Interrogative pronoun も同じく Object の前に出るとい

snake（スネイク）蛇。type（タイプ）字體。
Rĕl′ā-tīve（れラティヴ）。In-tĕr-rŏg′ā-tive（インタろガティヴ）。none（なン）＝no one.

ふ例證を示すと

What do you say? 〔君は何と言ひますか〕。

Whom are you looking for?

〔あなたは誰れをさがして居ますか〕。

この what や whom は do say や are looking for の Object である。あたりまへなら其次に置かるべきものである。併し決して

Do you say **what**?

Are you looking for **whom**?

などゝ言はないで、これを文の始めに出す事は諸君は御存知の事であらう。即ち疑問代名詞は客語である場合でも(上例の如き動詞の客語たる時と、下例の如く前置詞の客語たる時を問はず*)常に Verb の前——イヤ寧ろ文の眞先きといふ方がよからう——に出すのである。

また emphsize する爲めにも、例へば

Silver and gold I have none.

〔金貨や銀貨は一つも持つて居ない〕。

これは本當なら

I have no **silver and gold.**

とすべき所で、即ち silver and gold は have なる Verb の

* 尤も前置詞の客語たる際には其前置詞をも疑問代名詞と一所に文の最初に出して With what do you speak? (何を以て話しなしますか)などゝいふ。これは What do you speak with? としてもよい。併し Do you speak with what? とは出來ぬ。

Object である。唯其 silver and gold なる語を強くいはんために特に Verb の前に出したのである。斯んな風に特に意味を強く言ひ表はしたき語は普通の順序とは前に出して言ふ事は屢々ある例である。

つまり (1) 關係代名詞 (2) 疑問代名詞 (3) 特に意味を強く言ひ表はしたいものが客語となる時はこれを Verb よりも前に置く。其他普通の場合には客語は總て Verb の後にあるべきものであると覺えて置けばよい。

B. Double Objects—Dative Verb.

Double Object の事は「第三英文の話」第十七頁以下第十九頁にある。

それに依りても知らるゝ如く Transitive Verb の中には Direct Object (直接客語) 即ち「何を」といふに當る thing (物) を示す語と、Indirect Object (間接客語) 即ち「誰に」といふに當る Person (人) を示す語と二つの Object を持つ事の出來るものがある。

この Direct Object と Indirect Object は何れを前に置き何れを後に置いても、大なる差支はないのであるが、普通は

Dā′tive (ディティヴ)。Di-rĕct′ (ディれクト) 又 Di-rĕct′ (ダィれクト) とも發音す。Ĭn-di-rect (インディれクト) 又 Ĭn-di-rĕct′ (インダィれクト)。

Indirect の方を Direct の前に置く

のである。但し Direct Object が Pronoun の it で、Indirect の方も同じく Pronoun の時に限つて其順序を轉じて Direct を Indirect の前に置くが普通といふ事になつて居る。だから。

I have told him the fact.

〔僕は其事を彼に話した〕。

とあるべき所を the fact の代りに it を遣ふと。

I have told it him.

と him の前に置くが普通である。I have told him it. とは殆ど言はない。尤もこの通り Indirect の方が後になれば、前置詞の to を入れて。

I have told it to him.

とするがあたりまへであるが、この例の樣に、Direct, Indirect の兩方ともが Pronoun の時に限つてはこの to は略しても差支ない、無論略さずとも差支ないといふのである。

つまり二重客語の順序は (1) 間接 (2) 直接を普通とし。直接が it で間接も何等かの代名詞の時は (1) it (2) 間接と

fact（ファクト）事實。

なり、其際間接の前に置くべき筈の前置詞 to はこれを略してもよいといふ事である。

* * * * *

今も鳥度言ふ通り Direct Indirect の兩 Objects が何れも Pronoun でない限りは Indirect の方を後に置いた場合は必ず其前に Preposition の to を入れねばならぬので、これは既に「第三英文法の話」第十八頁に詳しく説明した通りである。

所がこゝに buy（買ふ）, get（得る）, make などいふ動詞の時に限てはこの to を用ゐないで for を用ゐ、また ask（問ふ）などの時には of を用ゐ、また play（遊ぶ）などには on を遣ふ事がある。

He gave me some money.
He gave some money to me.

〔彼は私に金をくれた〕。

He bought me a book.
He bought a book for me.

〔彼は私に本を買つてくれた〕。

He asked me a question.
He asked a question of me.

mŏn'eȳ（まニ）金。quĕs'tion（くゥェスチァン）質問。trĭck（トリク）悪戯。buȳ（バイ）。ōwe（オーゥ）。

〔彼は私に問を發した〕。

{He played me a trick.
{He played a trick on me.

〔彼は私に惡戯をしかけた〕。

だから間接客語を後に置く時には前置詞 to を置くが普通だが、語に依りまた場合に依つて其 他の前置詞 for, of, on などを用ゐるに注意せねばならぬ。

* * * * *

この Double Objects は give (與ふ) を始め bring (持ち來る), sell (賣る), buy (買ふ), owe (借りる), lend (貸す) pay (拂ふ), send (送る), write (書く), teach (教ふ), tell (話す), get (得る) などの Verb の時には大抵これをとる。だから Direct Object を他動詞に必ず有るべき一つの Object と見れば、其の以外餘計にあるものともいひ得べき Indirect Object の事を Dative Case といひ、かく Double Objects をとる Verb の事を Dative Verb (間接客語の動詞) といふ。Dative とは giving (give の) といふ意の語でつまりこの常に間接客語を取る語の總代として give より名前を選びそれより名附けた名前である。だから Dative Verb とはつまり「give の Verb」といつた位の意から出來たものである。

C. Complete Transitive Verb と Incomplete Transitive Verb—Factitive Verb.

Transitive Verb の中には Object の外に更らに Complement (補語) をとるものがある。この Complement の事は「第三英文法の話」第二十一頁以下第三十二頁までに詳しく説明して置いた。其れに Subjective Complement (主語の補語) と Objective Complement (客語の補語) と二つある事を說いてあるが、Transitive Verb のとる Complement はこの Objective Complement の方で、後節に說く Intransitive Verb (自動詞) のとる Complement が Subjective Complement の方であるのである。

讀者は此際彼書の Complement 殊に其 Objective Complement の所を今一度熟讀して戴きたい。

(1) Complement の性質、定義。

(2) Objective Complement の性質、定義。

(3) それは如何なる語よりなるか。

(4) それと Object, 殊に Double Objects との區別など

充分注意して了解して頂きたい。こゝには重複を恐れ總

Cŏm-plēte' (コムプリート)。 Ĭn-com-plēte' (インコムプリート)。 Făc'tive (ふァクティティヴ)。 Cŏm'ple-ment (こムプリメント)。

てそれ等の事項を再錄せぬが、それが解らぬとこゝに說明せんとする事柄は全く解らないから。

* * * * *

斯んな風に Complement なくとも Object だけで意味完全するもの (Object は Double Objects でもそれは差支ない) を Complete Transitive Verb (完全他動詞) といひ、Complement なくては意味の通ぜぬ他動詞を Incomplete Transitive Verb (不完全他動詞) といふ。

この Incomplete Transitive Verb の事を文法家に依てはまた Factitive Verb (譯しては矢張り、不完全他動詞) といふ。Factitive とは making (make の) といふ意味であるが、何故斯んな名が附いたかといふと、それは斯うである。

この Complement を常に要する Transitive Verb は何かといふに、make (……をして……しむ) を筆頭に、keep (……を……にして置く), call (……を……といふ), name

以上の動詞が Factitive Verb としての用例 :—
He *made* me a servant. 〔彼は私を召仕にした〕。 *Keep* it warm. 〔それを暖くして置け〕。 We *call* it monkey. 〔吾人はそれを猿といふ〕。 We have *named* him "Taiko. 〔皆で彼を「太閤」と名を附けて居る〕。 I *think* him honest. 〔彼は正直だと思ふ〕。 They *find* it difficult. 〔六つかしいと氣が附いた〕。 *Leave* the door open. 〔戸をあけたまゝにしておけ〕。

(……を……と名く), think (……と思ふ), find (……と氣が附く), leave (……を……のまゝにして置け) などである所から其總代たる make をとつて「make の Verb」即ち Verbs of making 即ち Factitive Verb といふ事になつたのである。

D. Reflexive Verb.

Transitive Verb は必ず Object がなくてはならぬ。所でこゝに其 Object が Verb の示す動作をした本人、即ち Subject (主語) と同じ人又は物の事がある。例へば。

He killed **himself**. 〔彼は自殺した〕。といふ文に於て himself は即ち killed なる Transitive Verb の Object であつて、Subject の he と同一人を表はして居るのである。

Don't praise **yourself** so much.

〔そんなに獨り褒めをするな〕。

Let us avail **ourselves** of the opportunity.

〔お互に機會を利用する樣にしよう〕。

などには主語が省かれて居るが、實は **You** don't praise ……, **We** let us……とあるべきもので、矢張り Transitive

Re-flĕxi've (リフれックスィヴ)。 ā-vāil' (アヴェイル) 利用す。 ŏp-por-tū'nī-tȳ (おポてューニティ) 機會。

の praise や avail の Object となつて居る yourself や ourselves と同一人が主語であるのである。

斯んな風に—self 又は—selves といふ代名詞(名けてこれを Reflexive Pronoun 反射代名詞といふ事は御存知であらう)を Object とする他動詞の事を名けて Reflexive Verb (反射動詞) といふのである。

Definition (定義)—When a Transitive Verb has a Reflexive Pronoun for its Object, it is called a Reflexive Verb.

〔他動詞が反射代名詞を其客語としてとる時は、これを反射動詞といふ〕。

* * * * *

この Reflexive Verb を遣ふと自動詞の意味を他動詞を以て書き表す事が出來る。たゞ日本語にはそんな Reflexive Verb などいふものはないから、譯する場合は其語の通りに他動詞風に譯さないで、意譯して自動詞風にせねばならぬ。

例へば。

He *made himself* sick by *overworking himself*. 二つも他動詞があるが、これらを自動詞を遣つて書き改めて。

ō'vēr-wŏrk-ĭng (おゥヴァうォーキング) 働き過ぎる事。

He *became* sick by *working too hard*. としたつて同じである。譯して「彼は彼自身働き過ぎたが爲めに彼自身を病氣にした」なんか言つては日本語にならない、是非自動詞風に意譯して「彼は働き過ぎて病氣になつた」といはねばならぬ。

他の例を擧げる。

He *seated himself* (=sat down) on the bench.

〔彼はベンチに腰を掛けた〕。

She *laid herself down* (lay down).

〔彼女は寢ころんだ〕。

尙ほ此等の例に依ても知り得らるゝ如く、Object になつて居る Reflexive Pronoun は日本語では「自ら」と譯するか或は全然譯さないで置くがよいのである。

日本文を英文に譯する場合よく注意すべき事は、日本語では自動詞としていふ所を、英文では其儘 Intransitive (自動詞) で言ひ表はし得る場合と、また Transitive (他動詞) に直さねばならぬ場合とあるが、其 Transitive に直した場合には是非 Object を明示せねばならぬに、原文の日本語は自動詞だからそれのあらう樣がない、そんな時にはこの Reflexive Pronoun を遣つて早速其 Object とすればよいのである。次にそんな場合 (日本語では自動で英

lāĭd (れイド) lāy の過去。

語ではこれを他動とし反射代名詞を其客語としてある場合)を五つ六つ例示するから、それ等に就て、よくよく此呼吸を呑み込んでしまうがよい

缺席する =absent oneself*
隱れる =conceal oneself
言譯する =excuse oneself
(着物を)着る=dress oneself
己惚れる =flatter oneself
利用する =avail oneself
從事する =devote oneself

他に斯んな例は山程あるが、大體の見本だけを示せばよいのだから、斯んな事にして置く。

E. Causative Verb

a. The ship sinks. 〔船沈む〕.

b. Small leaks sink great ships.

〔小さな隙間が大きな船を沈める〕。

ab-sĕnt′ (アブセント)。 con-çēal′ (コンスィール)隱す。 ex-cūse′ (エクスキューズ) 許す。 drĕss (ドれス) 着る。 de-vōte (ディヴォウト) 勤める。 Caus′ā-tīve (こーザティヴ)。 lēak (リーク) 隙間。

*oneself のまゝは文に遣はぬ、これは若し I を主語とする文中に用ゐば myself とし、they を主語とする文には themselves として用ゐる事を示すので、つまり oneself とは myself, yourself, himself, herself, itself, ourselves, themselves, oneself, の總代である。此事は前にも説明したと思ふが念の爲め斷つて置く。

此二つの文を比較すると、同じ sink といふ Verb が a の方では Intransitive で b の方では Transitive である。*a* の sink は「沈む」で *b* の sink は「沈める」である。更らに別の例を擧げると。

a. A bird **flies**. 〔鳥飛ぶ〕。
b. The boy **flies** a kite. 〔小供が凧を上げる〕。

a. Rice *grows* in warm countries.
〔米は暖地に生ず〕。
b. The farmer *grows* large quantities of rice.
〔農夫が米を澤山に作る〕。

a. The bell **rings**. 〔リンがなる〕。
b. They **ring** the bell. 〔リンをならす〕。

以上の *a* は總て Intransitive で *b* は Transitive である。而して其 Transitive の Verb の意味は皆「昇ぼらせる」「生じさせる」「ならす」など譯してもよい。即ち其 Object たるものをして「……せしむる」反言すれば、其 Object たるものが或る動作をする cause (原因) を Subject (主語) たるものより與へて居る事を示して居るのである。斯かる Transitive Verb を別に名をつけて Causative Verb (使役動詞) といふ。

Verb の中には Intransitive の形其儘を Transitive に遣

rīçe (ライス) 米。 quan′ti-tīes (くゥォンティティズ) 量。

つて、此 Causative Verb とするものもあり、また中には多少其變を變じてそれとするものもある。例へば。

a. The price **rises**. 〔値があがる〕。
b. They **raise** the price. 〔値をあげる〕。

a. I **sit** in a chair. 〔椅子にかける〕。
b. I **set** a book on the shelf. 〔棚に本を置く〕。

a. The book **lies** on the shelf.
〔棚に横になつて居る〕
b. I **lay** the book down. 〔本を横にする〕。

a. A tree **falls**. 〔木が倒れる〕。
b. A woodman **falls** a tree.
〔樵夫が木を倒す〕。

以上の *a* の Verb は總て Intransitive Verb で *b* のはそれより出て Transitive となり、「……せしむ」「……の原因をなす」の意を表はすもの、即ち cause (原因) をなせる Verb. 即ち Causative Verb と稱するものである。

* * * * *

Transitive Verb の事は以上で先づ終つた。されば他動詞といふ内にも次の如き種類ある事を知らねばならぬ。

1. 普通の Transitive Verb—單に Object 一つをとるもの。
2. Dative Verb—Double Objects をとるもの。
3. Incomplete Transitive Verb 又は Factitive Verb といふ—Object の外に更に Complement をとるもの。
4. Reflexive Verb—Object として Reflexive Pronoun をといふをとるもの。
5. Causative Verb—Intransitive Verb より出でたる Verb で或る動作の cause を示すもの。

1, 2, 4, 5 等總て Complement をとらぬ Transitive Verb はどれでも Complete Transitive Verb といひて Complement をとるもの即ち Incomplete Transitive と區別する事を得。

F. Intransitive Verb—Complete と Incomplete と

これから Intransitive Verb (自動詞) の事を話さう。前にも言つた通り此種の Verb は總て Object を要せず、唯この Verb 許りで完全なる Predicate (叙語) を作る事を得るものである。例へば。

Birds **fly**. 〔鳥飛ぶ〕。
The sun **shines** 〔日照る〕。

の fly, shines の如きものである。

所でこの Intransitive Verb の中にも、それ許りでは完全なる Predicate を作れないで、別に Complement (補語) を要するものがある、此等の事は「第三英文法の話」第十四頁以下第十六頁迄の Predicate の所と、第二十一頁以下第二十八頁迄の Complement 及び Subjective Complement

の所を今一度讀んで承知して頂きたい。

(1) Predicate とは如何なるもので、其要素は何てるか。

(2) Complement とは如何なるものか。

(3) Complement と Object との區別。

(4) Subjective Complement と Objective Complement との區別、及び Intransitive Verb に附す Complement は總て Subjective Complement である事。

(5) Subjective Complement を作る語句の種類。

此等の事は同書を讀めば知り得る事で、此處の說明上是非知つて居て貰はねばならぬ事共であるから。

斯んな風に Intransitive Verb に Complement を要するものと、要せぬものとの二種あるから、分類上名けて前者即ち Complement を要するものを Incomplete Intransitive Verb (不完全自動詞) 後者即ち Complement を要せぬものを Complete Intransitive Verb (完全自動詞) といふ。

* * * * *

Intransitive Verb の內 (1) be (いつもいふ通り be とは be, am, are, is, was, were, been 等「……である」及び其變化の動詞の總稱と) (2) become, (……となる) (3) seem (……に見える) 等は或特別の場合を除けば大抵いつも Incomplete である。

また次の Intransitive Verb は Complete, Incomplete 何れにも用ゐられるが、意味は兩方共違ふ。

Complete の例	Incomplete の例
(4) **look.** *Look* here.	He *looks* healthy.
〔此處を御覽〕	〔彼は達者さうだ〕。
(5) **appear.** The stars *appear.*	She *appears* proud.
〔星が見える〕。	〔彼女は高慢らしい〕。
(6) **feel.** *Feel* the velvet.	Velvet *feels* smooth.
〔びろうどに さわつて御覽〕	〔びろうどは滑かな手ざはりだ〕
(7) **taste.** I *taste* the sugar.	Sugar tastes sweet.
〔砂糖をなめる〕。	〔砂糖は甘い味がする〕。
(8) **smell.** I *smell* a rose.	The rose smells sweet.
〔薔薇を嗅ぐ〕。	〔薔薇はよき香がする〕。
(9) **sound.** The trumpet *sounds.*	His voice *sounds* harsh.
〔喇叭が鳴る〕。	〔彼の聲はしやがれ聲だ〕。

次の Intransitive Verb は Incomplete に遣ふと become (……になる) の意を表はす。

hĕalth'ȳ (ヘルスィ) 健康さうに。 ap-pēar' (アピーア) 見える。 proud (プらゥド) 高慢な。 vĕl'vet (ヴェルヴェト) びろうど。 smōōth (スむーズ) 滑か。 tāste (てィスト) 味ふ。 swēet (スうィート) あまい。 trŭm'pet (トらムペト) 喇叭。 sound (さゥンド) 響く。

	Complete の例	Incomplete の例
(10)	**grow.** Plants *grow.* 〔木は成長す〕。	He has *grown* old. 〔年寄になつた〕。
(11)	**get.** I *got* a scolding. 〔叱られた〕。	He *got* angry. 〔怒つた〕。
(12)	**turn.** A wheel *turns.* 〔車輛が廻る〕。	Milk *turns* sour. 〔牛乳は酸くなる〕。
(13)	**fall.** Snow *falls.* 〔雪が降る〕。	He *fell* sick. 〔病氣になつた〕。
(14)	**go.** He *went* to school. 〔學校へ行つた〕。	He *went* lame. 〔びつこになつた〕。
(15)	**run.** The dog *run* fast. 〔犬が早く走る〕。	The dog *ran* mad. 〔氣ちがひになつた〕。

尙ほ斯んな例は澤山あるが、さまではと思ふから、此位で止めにして置く。

* * * * *

尙ほ一つ注意して置く事は Verb は大抵十中七八まで用ゐ方により Transitive にも Intransitive にも遣はれる

scōld'ing（スこゥルディング）小言。 ăn'grȳ（あングリ）怒る。 whēel（ホィール）車輪。 sour（さゥア）酸く。 lāme（れィム）びつこ。 hŏn'eȳ（はニ）蜂蜜。

ので、單に Transitive のみ、また Intransitive のみに用ゐらるゝ語は殆ど僅か許してある。

Intransitive の用例	Transitive の用例
Honey *tastes* sweet. 〔蜂蜜は甘い味がする〕。	The bee *tastes* honey. 〔蜜蜂が蜂蜜を味ふ〕。
This paper *feels* smooth. 〔此紙は滑かな手觸りがする〕。	The blind men *feels* every thing with his cane. 〔盲人は何でも杖で觸つて見る〕。
The flowers *smells* fragrant. 〔此花はよい香がする〕。	She *smells* the flower. 〔彼女は花を嗅ぐ〕。
The house *is building.** 〔家が建築中だ〕。	He *is building* the house. 〔家を建てて居る〕。
The drums *were beating.* 〔太鼓がたゝかれて居た〕。	They *were beating* drums. 〔太鼓を打つて居た〕。
The book *is printing.* 〔書籍は印刷中だ〕。	They *are printing* the book. 〔書籍を印刷して居る〕。

日本語では上例の右側の樣に言ふが重もで、自動詞を使つて「太鼓がたゝかれて居る」だの「書物が印刷されて居る」だのとは餘り言はぬが、英語では寧ろ此方を使ふ

frā'grant（フれィグラント）芳しく。 build'ing（びルディング）建てゝ。 drŭm（ドらム）太鼓。 bēat'ing（びーティング）打つて。 print'ing（プリンティング）印刷して。 ĭm-pēr'son-ăl（いンぱーソナル）非人稱の。

事が多い位て、これも東西兩語の癖の相違てあるから注意せねばならぬ。

G. Impersonal Verb.

Intransitive Verb の中には其 Subject（主語）として常に Pronoun の it をとり、其 it が別段何を指すでもない樣な妙なものがある。例へば。

It snows.〔雪が降る〕。

の如きもので、意味上からいへはこれは。

Snow is falling.

といふと同じてある、即ち it は別段何を指すといふでもなく、唯 Subject がなくては文章にならぬといふ所から、ぼんやり當らず障らずの斯んな Pronoun を Subject としたまてのものてある。天氣だの距離だの時などの事をいふ時などによく此形をとる。

此形を文法上 Impersonal Construction（非人稱的構造）といひ上文の snow の如きこれに用ゐらるゝ Verb を

rāin（れィン）, snōw（スのーゥ）thŭn'dēr（さンダ）等は名詞と動詞と兩方に用ゆ。frēez'eş（フリーゼズ）。thą'wş（ソーズ）。hāilş（ヘィルズ）。dąwned（ドーンド）。lis'ened（リスンド）。brĕath'less（ブれスレス）呼吸せざる。in'tēr-est（いンタレスト）興味。

* 以下の三文は The house is being built. The drum were being beaten. The book is *being* printed. と受身に書くが本當だが、上例の樣にさうでなく書くが普通の樣になつて居る。此事は「第三英作文の話」142 頁に鳥渡說明して置いた。

Impersonal Verb（非人稱動詞）といふ。尙ほ他の例を擧げると。

It rains.〔雨降る〕. It thunders.〔雷鳴る〕。

It freezes.〔氷張る〕。It thaws.〔氷解ける〕。

It hails.〔雹が降る〕。It dawned.〔夜があけた〕。

尙ほ此形は Transitive Verb にも澤山ある。例へば。

It took me long to learn it.〔それを學ぶに長くかゝつた〕。

H. Prepositional Verb.

We *sent for* the doctor.〔醫者を迎へた〕。

They *listened to* him with breathless interest.

〔面白がつて呼吸をこらして彼の言を聞いた〕。

上例の sent や listened は無論 Intransitive であるが、意味から考へると「……を迎へた」「……を聞いた」といふので他動詞の樣に思はれる。

併し the doctor といひ him といふ Object は前置詞の for なり to なりの Object で Verb の sent や listened の Object でないから、形からいへば飽くまで Intransitive である。

て、斯んな風の Verb はこれを其次の Preposition (前置詞) と二つより合成せる一つの熟語と見て、Prepositional Verb (合成動詞) と名け一種の Transitive Verb と見てもよいのである。即ち

自動詞+前置詞=他動詞と、斯んな風になる例もあると覺えて居ればよい。

て、此種の Verb は假令 Passive Voice (受身態) に用ゐられても其 Preposition を必ず伴ふ事と、其 Preposition と二つて一の Prepositional Verb として Transitive Verb の中に入れてもよいといふ事に注意せねばならぬ。

The doctor was *sent for* (by us).

He was *listened to* (by them) with breathless interest.

斯んな風に Passive Voice (受身態) でも for や to を必ず伴はねばならぬ。更らに別の例五六を出して置かう。

Active They *waited for* me.
Passive I was *waited for*.
〔僕を待受けた〕。

Pás'sive (パッスィヴ)。Prēp-ō-si'tion-ăl (プれポズィシァナル)。wāit'ed (ラェィテド)

Active They *laughed at* him.
Passive He was *laughed at*.
〔彼を嘲つた〕。

Active We must *look after* the children.
Passive The children must be *looked after*.
〔小供をさがさねばならね〕。

Active You can *rely on* him.
Passive He can be *relied on*.
〔彼に信頼してよい〕。

Active They *talk about* him.
Passive He is *talked about*.
〔彼のうはさをする〕。

こんな風に Prepositional Verb として附く Preposition には at, of, on, to, for, after, about など種々ある。

I. Cognate Object.

總ての Intransitive Verb は Object がいらない筈であるに、こゝに一つ或種の Object を用ゐる Intransitive Verb がある。例へば

I **slept** a sound *sleep*. 〔私はよく寢た〕。

re-lī' (リらィ) on たよる。Cōg'nate (こグネト)。heärt'ĭ (はーティ) 心から。strānge (ストれインヂ) 妙な。drēam (ドリーム) 夢。

の如きもので、slept は自動詞でありながら sleep なる Object を取つて居るのである。

併しながら此の Object なるものは普通の Transitive の Object とは類を異にし、其 Verb と同じ意味を表はせる Noun であつて、日本語に譯せば全く譯さずともよい位のものである。

で、斯んな同じ意味の Object を Cognate Object（同屬客語）といひ、Intransitive も特にこの Cognate Object に限り、これを有して差支ないといふ事に定めてある。尙ほ此種の他の例をもう少し次に示して置かう。

He **laughed** a hearty *laugh*. 〔心から笑つた〕。

I **dreamed** a strange *dream*. 〔妙な夢を見た〕。

He **lives** a happy *life*. 〔結構に暮して居る〕。

He did not **die** a natural *death*.

〔一通りの死樣をしなかつた〕。

He **fought** a good *fight*. 〔よく戰つた〕。

He **sang** a fine *song*. 〔面白く歌つた〕。

以上の例のものは總て Verb より直接出來た Cognate Object 許りである。また

We **ran** a *race*. 〔駈つこをした〕。

nătʼur-ăl（なテュラル）自然の。 fought（フォート）fight（戰ふ）の過去の形。 săng は sing の過去の形。 sŏng（そンク）歌。 cōurse（コゥス）道路。 băttʼle（ばトル）戰爭。 strŭck（ストらック）打つ。 blōw（ぶろーウ）打つ、吹く。 brĭsk（ブリスク）そよそよとした。 gāle（げィル）軟風。

He **ran** his own *course*.

〔自分の行くべき方へ駈つた〕。

He **fought** a good *battle*. 〔よく戰つた〕。

I **struck** a hard *blow*. 〔ひどく打つた〕。

It **blows** a brisk *gale*. 〔風が心地よく吹いた〕。

此等の例は run と race, fight と battle の樣に語は違ふが意味は皆似よりのもの許りである。また

He **looked** his *thanks* (=look of thanks).

〔感謝の顏附をした〕。

He **shouted** his *loudest* (=loudest shout).

〔一生懸命に叫んだ〕。

He **fought** his *best* (=best fight).

〔一生懸命に戰つた〕。

此等の例の如く Cognate Object を略して居るもの

He must **fight** *it* (= the fight) out to the end.

〔勝敗がつくまで戰はねばならぬ〕。

We have no horse; so we must **foot** *it*. (=go the distance on foot).

〔馬がないから歩るいて行かねばならぬ〕。

此等の例の樣に Cognate Object の代りに it を以てす

るものと都合四種類あるが、何れも自動詞で Object があるのだから烏渡妙に思はれる。

* * *

以上 Intransitive Verb の事を大略述べ終つたから、例に依り其分類の一覽を次に掲げて置かう。

1. **Complete Intransitive Verb——Verb だけで何等他の語を用ゐずとも意義完備するもの。**
2. **Incomplete Intransitive Verb——Verb の外に Subjective Complement なくば意義の完備せぬもの。**
3. **Impersonal Verb——人や物を指すでなく、唯漠然とした意義の it を Subject とするもの、但し Transitive にもこの類の Verb はある。**
4. **Prepositional Verb——Intransitive と Prepostion とで一つの熟語となり Transitive の意義をなすもの。**
5. **Cognate Object をとる Intransitive Verb——Verb と同じ意味の Noun を Object とするもので此類の Verb は形は Transitive であるが、特にこれを Intransitive の一つと見る。**

J. 兩者の轉用

前にも言ふ通り大抵の Verb は用ゐ樣に依て、Transitive にも Intransitive にも何れにも用ゐられる。併しこゝに言ふのはそれでなく、實際は一方のに遣つてあるのが、或事情により他のものに轉用したかの如く思はれる事をいふのである。次に其主なる場合を列擧して見ようと思ふ。

a. Transitive より Intransitive に轉用

それには三つの場合がある。

(1) 意義上餘り必要でない Object を省いてしまう。すると Object がない爲めに Intransitive に轉用したかの如く思はれる。

Transitive の用例	Intransitive に轉用の例
The cat sees *the mouse*.	The cat can see in the dark.
〔猫が鼠を見る〕。	〔猫は暗りで見える〕。
He speaks *English*.	Man can speak.
〔彼は英語を話す〕。	〔人間は話す事が出來る〕。
We ate *our dinner*.	We eat in order to live.
〔昼飯を食す〕。	〔生活する爲めに食す〕。
They study *Grammar*.	They study diligently.
〔文法を學ぶ〕。	〔勉强して學ぶ〕。

(2) Reflexive Object を省略してしまつて差支ない場合これを省くと Object がないから Intransitive に轉用された事の樣に思はれる。

Transitive	Intransitive
The troops dispersed *the mob*.	The mob dispersed (themselves).

〔軍隊が一揆を追ひ散らした〕。

The rocks **hid** *the lion.*

〔岩間が獅子を隱した〕。

We **feed** *a horse.*

〔馬を飼ふ〕。

〔一揆が散々になつた〕。

The lion **hid** (himself) among the rocks.

〔獅子が岩間に隱れた〕。

A horse **feeds** (itself) on hay.

〔馬が草を食つて居る〕。

(3) Transitive Verb を Passive の意味に用ゐると、Object が明示されない爲に Intransitive に轉用された事の樣に思はれる。

Transitive	Intransitive
He will **sell** *the horse.*	The horse will not **sell** (be sold).
〔彼は馬を賣る〕。	〔馬は賣れまい〕。
You will **break** *the rope.*	The rope will **break** (be broken).
〔繩を切る〕。	〔繩が切れる〕。
They **are building** the house.	The house **is building.**
〔人々が家を建てゝ居る〕。	〔家が建築中だ〕。

Troop (トるープ) 軍隊。 dis-pĕrsed′ (ディスぱーズド) まきちらす。 mŏb (モップ) 一揆。 rŏck (ろック) 巖。 fēed (フィード) 養ふ、餌を食ふ。 sĕl′ (せル) 賣る。 breāk (ブれィク) 切る、破る。

b. Intransitive より Transitive に轉用

これにも主なる場合が三つある。

(1) Cognate Object 又はそれに類似のものゝある時、此場合は形の上から見ればまるで Transitive の樣に思はれる。

(2) Causative Verb を用ゐると、Transitive の樣に思はれる。

They **stood** him in a corner.

〔彼を隅に立たせた〕。

(3) Prepositional Verb を用ゆると、Transitive の樣に思はれる。

以上の事は詳しく直ぐ前に述べた事であるから繰返へしてゝに說明する事を略す。

* * * *

尙ほ序ながら一つ言つて置く事は普通 Transitive にしか用ゐられぬ Verb を以て Intransitive の意味を表はすには、これを Passive の形にするか、または Reflexive Object を持たせばよい。例へば seat といふ Verb は Transi-

côrn′ ĕr (こーナ) 隅。

tive であるが、これを Passive にして be seated とするか、Reflexive Object を加へて seat oneself とすれば Intransitive の意に用ゐられるのである。

Intransitive——He seated himself.
Transitive——He sat down.
〔彼は坐つた〕。

Intransitive——He was seated.
Transitive——He was sitting.
〔彼は坐つて居た〕。

* * * *

以上一通り Verb の分類に就て記述し終つた。頁數の都合などあつて終りの部分が多少説明が粗になつたかと思ふ所があるが、Verb の部はこれで終結てはなく、これより其 Conjugation (變化), Voice (態), Tense (時相), Mood (法) を始め Auxiliary Verb (助動詞), Verbals (類似動詞) の事など總てを説明せねばならぬので、實はまだこれまでの所は眞の Verb の序論に過ぎないので、引續き此等の本論は近刊の「第五英文法の話」に詳説する覺悟であるから、本篇に言ひ漏した所や、説明の粗であつた所などは、同書に於て充分補ひたいと思ふ。

例に依り動詞の分類の一覽表を次に掲げて復習の便に供して置く。

- Verb
  - I. Finite Verb (治定動詞)
    - 1. Principal Verb (本動詞)
      - A. Transitive Verb (他動詞)
        - a. Complete (完全)
        - b. Dative (二重客語)
        - c. Incomplete (不完全) (又の名) Factitive
        - d. Reflexive (反射)
        - e. Cousative (使役)
      - B. Intransitive Verb (自動詞)
        - a. Complete (完全)
        - b. Incomplete (不完全)
        - c. Impersonal (非人稱)
        - d. Prepositional (合成)
        - e. Cognate Object (同屬客語) をとるもの
    - 2. Auxiliary Verb (助動詞)*
  - II. Verbals* (類似動詞)
    - 1. Infinitive (不定法)*
    - 2. Participle (分詞)*
    - 3. Gerund (動名詞)*

* を附するものは「第五英文法の話」に説明の豫定のもの。

豫告

◎「第五英文法の話」は十一月中に發行、Verb, Verbals の事など、總て English Grammar 中の最も六つかしく、最も面倒な所を、出來るだけ解りよく詳しく説明する考で居ります。

◎十月には御待兼の「發音綴字の話」第一篇を出します。發音ばかりの書物は近頃立派なのが大分出版されたようですが、發音と綴字と兩方面に渉り、平易に而かも詳しく説明したものは、恐らく此書が始めだらうと信じます。

◎十一月には今一册「英文日記の話」といふのを出します。新年から英文で日記を書かうと思ふ諸君の好伴侶として、日記に關する心得、用語句、文例を説いたものです。何れも倍舊の御愛讀を願ひます。

初等英語叢書第十三編

第四英文法の話

明治四十三年十月六日印刷 ● 明治四十三年十月[illegible]日發行

不許轉刻 ● 不許漢譯

検印

著作者　英語研究編輯部
代表者　吉田幾次郎

發行者　東京市麹町區富士見町六丁目十番地　小酒井五一郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　飯田三千太郎

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

發行所
東京市麹町區富士見町六丁目十番地
英語研究社
振替貯金口座東京一八二三六番

（定價金二拾五錢　郵税四錢）

理想的初等英語雑誌

初等 英語研究

第三巻第十號 十月一日發行

▲如斯やさしく面白き初等英語雑誌あるか!?

やさしくて詳しくて叮嚀で親切なる日本唯一無二の初等英語雑誌として、今や全國津々浦々至る所に愛讀者を有せざるなき我が『英語研究』を未だ見ざる人ありや。若しありとせば請ふ速に知人の愛讀者に就きて其本誌の爲めに受けたる利益の如何に多大なりしかを問へ。若し斯る知人なしとせば直ちに郵券六錢を本社に投じて見本壹册を請求せよ。本誌壹册を熟讀する者はよく嘗て覺えざりし英語の興味を解するを得ん。半年よく之を精讀する者は英語を研究する事の案外樂み多き者なる事を悟るを得ん。若しそれ一ヶ年を通じてよく之を愛讀する者あらんか、嘗ては最も不得意なるを憂ひたりし英語を得意に讀みもし書きも話しもするに至るを得ん。

毎月一回一日發行定價金六錢郵税五厘
一ヶ年分十二册七十錢但郵税共

讀本研究(第三讀本の研究)、英語蓄音機(發音綴字の研究)、旅行記の數頁(珍給ばなし)、たうもろこし(讀本獨學び)、秋(暗誦用英文、西洋秋の圖入)、世界は狹くなる(英文組立法)、英語の並べ方と句讀點の附方、ホウトー唄(英語の歌、譜附)、韓國併合(やさしい會話)、オウルドボイズソサエテイ(輪講會)、場所を示す前置詞(文法の話)、記者日記、十月用日記語句、釣瓶の上下(自修用英文)、和文英譯の公式(ものだから、から方)、商用英語(新聞廣告の雛形)、作文研究、熟語研究、英語の手紙、新聞の研究、旅行記の數頁の譯と註、讀書の手引、參考書案内、英語讀會、研者の發展、讀者の領分、記者の領分、英語顧問、懸賞試驗問題、同答案、懸賞習字の披露、同手本、懸賞繪さがしの研究、同答案、懸賞繪さがし新題、同答解、無懸賞月並課題其他

秋季附錄 ― 王と獸と鳩(西洋お伽噺)三色 前附
第五回懸賞大試驗問題と用紙

第二卷合本(自一號至十二號)代價郵税共金八十錢

▲號を追ふて愈々益々やさしく面白くなる!!

東京市麹町區富士見町六ノ十 英語研究社 郵便振替東京一八二三六番口座

中學上級程度の英語雑誌

新英語

第一巻第七號 十月一日發行

毎月一回一日發行●定價金五錢郵税五厘●一ヶ年分郵税共六十錢

◎徒らに多方面の記事と執筆者を求めず眞摯に本誌の爲めに責任を以て筆を執る！

初等と冠してない世間の英語雑誌はツンと六つかしい、到底中學の三年や四年――イヤ五年や補習科生でも餘程の優等生でなくては半分も解らない。また世間の英語雑誌は餘りに課外に樂み半分に讀むものにしては眞面目でテンで趣味がない。我が「新英語」はこの初等と冠してある極々やさしい雑誌と冠して無い極々六つかしい雑誌との中間――通中學生が三年以上補習科までの程度の人なら、假令優等生ならずとも、イヤ劣等生でも面白く樂みながら英語の力を養はれる樣、本社一流の筆法を以て書く雑誌である。本社の「初等英語研究」と「初歩英語」が出來て英語と英語雑誌との趣味が始めて學生仲間に普及されたと嘗て某大家から讚辭を賜つたが、今度はこの「新英語」に依て更らに上級の中學生一般に英語雑誌の趣味を廣めたいと思ふのである。

『新英語』第一卷第七號目次

▲第三讀本研究 最も廣く行はる丶各國の第三讀本中より研究材料を採り、譯解註釋を施したるもの、此程度の讀者が讀んで解らぬ樣な六つかしき事は說かず

▲第四讀本研究 同上第四年程度を標準とし註釋一歩も其範圍外に出でず

▲第五讀本研究 同上第五年程度の六つかしい事項をやさしく詳しく說く所本社一流の手腕を見よ。

▲英文學研究 補修科程度にして熊本學習院、教授の擔當、教授獨特の適確なる譯文、親切なる註釋は益々適確にして愈々親切なり。

▲英文法研究 各種の文法教科書中の例題により縱横英文法の要所を說く

▲和文英譯研究 ―說いて最後に一般の公式として應用例題を示して之でも呑み込めぬかとまで究込んで說明す

▲熟語慣用句研究 其說く所の方式は新式にして其範例豊富なり、これまでの熟語辭典まるぬきのものとは雲泥の差

此外「最新智識研究」は世界の進歩を敎へ、「課題研究」は本誌より得たる智識を實際に應用練習せしむるものなり。

◎請ふ花々しからずも雄々しく統一ある本誌の武者振を見よ！

東京市麹町區富士見町六ノ十 英語研究社 振替口座東京一八二三六番

極めてやさしく極めて面白し

最新最美の英語講義錄!!

英語の手ほどき

第一卷發行
正價廿五錢
郵稅四錢

『英語研究』記者編著全部六冊毎月一冊發行第一より第三冊迄第一讀本程度第四より第六冊迄第二讀本程度毎冊挿繪數十說明平易叮嚀

田舍に居てよい先生を得ない爲め變な英語を習つて居る人や、六つかしい英文學書は讀めるが却て讀本の一が正確に解せない樣な人の多いのは氣の毒千萬といふよりは寧ろ慨嘆至極の事である。總て物事土臺が大切、然るに彼等は此土臺を無暗に築かんとし、また不注意に築き上げたのである。これではどうして其上に立派な建築が出來ようか。本書は此等の人をして更に容易に完美の土臺を築き直させんが爲め今度新刊するもの、最新進歩の語學教授に基き第一第二讀本程度の英語を發音綴字譯解作文會話の全科に渉つて平易に系統的に說明す。且つ其材料は總て新著の舶來讀本から採り珍奇な繪を挿んであるから、趣味津々たる中に研究の歩を進める事が出來る。初めて英語を學ばんとする者は勿論、今まで變な研究をして基本的智識の完備して居らぬ學生は必ず本書に就け。『英語研究』記者一流の趣味多き筆は本書に於て愈々益々圓熟を極めて居る。

東京市麹町區十ノ六町 富士見軒
英語研究社
振替口座 東京一八二三六番

初學者のための英語雜誌

初歩英語

第三卷第一號 ㊗ 十月一日發行

毎月一回一日發行

定價一部金五錢郵稅五厘 六ヶ月六冊三十錢 一ヶ年十二冊六十錢

日本第一のやさしい英語雜誌

恐らくこれを讀む者はこんなにやさしく英語が解るものかと驚くだらう。

あのやさしい親切な『英語研究』の記者があれより一層やさしい親切な雜誌としてこれを發行する事になつたのです。講義錄の如く固くろしくなくて、しかも順序立つて英語の發音、綴字、讀方、譯解、文法、作文、會話、習字と全班に渉つて面白おかしく講義して行くのです。されば『英語研究』の讀者も讀まねばならぬ、あれが解らぬで困つて居る人も無論讀まねばならぬのです。

英語を知らぬ人の讀む

英語雜誌

今後の日本人が英語を知らなくては大きな恥辱、されば此雜誌は國民必讀の雜誌といつてよい。

第一讀本研究會（十頁に渉る講義、詳密無比）
行かうぢあないか（英作文組立法、寫眞版給入）
新世界國つくし（新式獨案內、寫眞版數個）
繪ばなし（遊びと働き）
金と金色（英文法手ほどき）
狐と鳥（西洋お伽噺、繪入詳註）
發音と綴字の話（今樣松山鏡後篇）
鳥瞰（英國地誌の說明）
英習字の話（懸賞課題）

●第一卷合本 自一號至十二號 代價郵稅共四十六錢
●第二卷合本 自一號至十二號 代價郵稅共四十六錢

懸賞暗誦問題成績、ハイカルア川柳商品しらべ、記者より、其他

東京市麹町區十ノ六町 富士見軒
英語研究社
郵便振替口座 東京一八二三六番

初等英語叢書

第一篇 初等英作文の話　英作文の手ほどきを最も分り易く説明したるもの

第二篇 初等英文法の話　英文典を誰れにも呑み込める様懇切に講述したるもの

第三篇 詳註 西洋幽靈の話　小説に初學にも讀まれる様譯文と詳註を加へ字引を附せるもの

第四篇 ローマ字の話　ローマ字位と云ふ人及初めて英語を學ぶ人に切に一讀を望む

第五篇 第二英作文の話　本編には主として動詞助動詞の用法殊にシヤルウイルの用法を説く

第六篇 第二英文法の話　内容の詳しき大文典の如く平易に説明する處初等の名に背かず

第七篇 アラディンのランプ　アラビヤンナイトの中尤も面白き物語例に依り譯文正確註解詳密

第八篇 ロビンソン、クルーソ　有名なる物語を平易なる英文に綴り替へたるもの、譯註字引附

英語研究記者編著

英語英文の書籍は澤山ある。併し眞の初學向は極とない在つても不親切な大ざつぱな俗受專門のものばかり、本當に讀者の爲めを思つたものは殆どない。此叢書は此陷缺を充すため英語研究記者が新に稿を起したもの、これを讀めば英語を解らぬものだの六づかしいものだのと云ふ人は恐らく無くなるだらう。

毎冊 約百五十頁餘 正價各金廿五錢 郵稅四錢

發行所 東京市麹町區六番町十二 英語研究社 振替東京一八一六三 口座

語叢書

第九篇 第三英作文の話　本編には最も時相と受動態の文章の作り方を詳密に記述せり

第十篇 第三英文法の話　英文法中の骨子とも稱すべき文（センテンス）を詳述せり

第十一篇 後のロビンソン　好評を博したる前編の續編趣味益々多く知らずんば讀了し得べし

第十二篇 イーソップの話　英學生が必ず讀まなくてはならぬ書、字引、註解例に依りて精密無比

第十三篇 第四英文法の話　愈々文法の本格とも稱すべき動詞を説明す解法周到亂麻を斷つ如し

第十四篇 ギリシヤ神話　初學者に英文學の妙味を味はせん爲め簡易なる英文を以て綴りたるもの、譯註如例精和

第十五篇 發音綴字の話　十一月發行

第十六篇 英文日記の手引　十二月發行

發行後の衆評

今日まで此叢書を讀んで禮狀を寄せられた讀者も非常に澤山ある。中には「未だ嘗て如斯叮嚀に如斯親切に説明周到を極めたる書あるを見ず初學者の爲め慈母に堪ず」「作文や文法は常に六つかしきものと思へるに案外解り易きに驚く」と記者は益努力して此説辭を空ふせざらん事を期す。

學科復習の最新法

中等教科
カード式參考書

實用新案登錄 カードクップ利用

學科多端、記憶至難、復習煩雜、時間不足、學生諸君果して此感なきを得るか、本カード式參考書は此欠点からしめんが爲めに整備せる內容と奇拔なる裝禎とに因つて成れり、眞に是れ學生無上の好伴侶、速に利用して學力を增進せられよ。

一 新案特許カードブックの特長を利用し各教科書を參照して編輯裝禎せる斬新奇拔の學科復習、受驗準備の最新案カード也

二 各學科凡て知名なる實地教育者の執筆になり從來の表解、參考書等に比して內容大ひに完備し裝禎亦優美携帶に便也

三 カードの表面は秩序的に問題と略表を掲げ裏面は是が說明を兼れて詳細なる參考書の體を爲したれば使用者は記憶力を養成すると共に各學科を極めて有効に復習し得べし

四 各葉拔き差し自由にて拔々に携帶し得れば僅少の時間をも利用するを得且自製のカードを何處にも挿入するを得べし

五 每綴索引を附して探索に便じ別に參考として表面には最近十年間の高等教育各學校入學試驗問題を分載して練習に便せり。其他有益なる特色は一見直ちに知るを得ん

▲總クロース製袖珍美裝用紙强硬(銀線金具附) **每綴拾八錢** 郵送料各綴二錢宛

新刊書目

國文典	日本史	日本地理	代數學
漢文故事	東洋史	外國地理	動物學
英文典	西洋史	算術	植物學

以下出

記入用 白カード 百廿枚紐綴定價右參考書と同形同樣の郵稅共金十二錢 物作製及補充用に便也

發行所 東京市麹町區富士見町六ノ十 振替口座東京一八二三六番 英語研究社

萬朝報英文記者

今井信之先生著書

中學 英作文獨習書

初步より說き起して中學全級に亘る英作文々法上の智識を多年英作文教授の經驗により如何なる初學の士にも獨習し得らるゝ樣新式獨創の方式を用ゐて講述したるもの也、卷末には便利なる索引を附したれば文法作文に關する疑問は之によりて忽ち氷解するを得ん

總クロース金字入裝 正價五十錢 郵稅六錢

英語 手紙の研究

在來の舶來書飜案の舊式を脫し新たに日本の手紙より英譯說述し併て手紙の作法、彼我書翰の異同を詳述したるもの、手紙の實例數百種には一々的確なる譯文と精細なる註釋とを施せり、卷末には細密なる索引を附し豐富なる語句の探索に便じたり

總布製裝禎美麗 三百餘頁 正價金六十五錢 郵稅金六錢

作文本位 英文小說講義

『英作文に熱達せんとするには英文を讀まねばならぬ』とは確かに眞理である、本講義は英作文を得意とせる著者が更に膽讀界に一新紀元を開かんため有名なるコナンドイル氏の探偵小說に一々詳密なる英作文本位の講義を爲したものである、苟も語學界の革新的氣運に接せんと欲するものは必ず此講義錄を讀まねばならぬ

口繪 原著者、俳優に扮せるシャロック、ホームズと其本人 四六判約三百頁美裝 定價金五十錢 郵稅金六錢

東京市麹町區富士見町六ノ十 英語研究社 振替口座第一八二三六番

如斯平易明瞭に說明せる數學書あり

東京府立第二中學校教諭 荒井常一先生編著

新式獨習 中學數學叢書

數學の知識は國民一般に一日も缺く可からざるもので而も其國が文明に進めば進むほど數學の知識をより多く要するので數理思想の乏しいものには、とても大事業を企てることは覺束ない。斯の如く數學は其だ必要な學科であるけれども是を學ぶには中々面倒で十人の內九人までは皆數學は不得手である、面白くない、と云つて居る。けれども夫はまだ研究の方法がよくない結果で若し適當の書物について落實に研究したならば誰でも國民としての數理的常識を養成することは必ず出來ると信ずる。本叢書は即ち此信念の下に著者が過去十年間の實地教授に鑑み特に學生の理會し惡い點に注意して最も平易に中學程度の數學を講義したもので

現に中學にあつて數學の不得手な吹つ學生及び新に中學程度の數學を獨修せられる諸君の爲に編纂したものである

▲算術の話

全二冊

定價各冊金卅錢
郵稅各金四錢

東京富士見町六ノ十 英語研究社 振替口座東京一八二三六番

別年學
英語カード

（英語研究記者著編輯）

引用書目

神田リーダズ
井上リーダズ
宮井リーダズ
ステップ
ナショナル
ス井ントン
ロングマンズ
ドリルブックス
グロウブリーダズ
開成館チョイス
鈴美堂チョイス
三省堂センチュリ
イムピートリアル
レナド柳橋讀本
ロイアルブリンス
鹽谷女子讀本
武田女子讀本
ユーニオン第四
文部省小學讀本
文法作文教科書

最も進歩せる英語記憶法!!

英語を覺ゆるにカードを用ゆるの利便は今や大方の等しく認むる所なり。されど坊間未だ其完全なるものを發賣せざるを以て學生の中にはカードの名を聞き、其利便なるを聞くも、未だ其如何なるものなるやを熟知せざる者多く、適々之を知り之を實行する者も、其製作記入に自ら之を爲さざるべからざるを以て、其煩勞の大なるに避易して完全に之を利用する者稀なり、蓋に斯道の一大憾事と云ふべし。

茲に我が編輯局同人、社友十數氏の盡力を得て、上記の二十有餘種百有餘册の教科書を涉獵し、苟くも其中の重要なる單語短句は悉くこれを收めて一枚のカードとし、文例二三を列記し、裏面には其譯語を示し、且つ動詞形容詞等の不規則的變化は總て之を併記し、之を中學一年程度より五年程度迄五函に區別し、一函五六百枚以上を收め別に索引及使用說明書を添附せるもの、されば初步より高等に至るまで在らゆる階級の英學生は各自己に適する種類を購求せば即日即刻よりカード式諸語の便多く功大なる新法を實行し得べく、其サヴォカビュラリを增し、其ナレッヂを堅實ならしむる事を得べし。用紙は前來上等の厚紙なれば優に數年の手荒き使用に耐ゆべし。

中學一年程度より五年程度迄五函カード數五六百枚以上定價一、二年用各卅八錢。三、四年用各四十五錢。五年用五十錢。郵送料一函小包料金八錢。二個金十二錢

記入用 白カード

右は前記の英語カードと同形同質の紙を用ひ使用者の隨意記入に便じたるものなり英語のみならず何にも使用し得。

（定價金貳拾錢●郵送料金四錢）

東京富士見町六ノ十 英語研究社 振替口座東京一八二三六番

●雜誌を綴り置くに便利なるもの

實用輕便 雜誌挿み

菊版 一揃 金拾參錢 郵税四錢
四六二倍判（堅九寸横六寸五分） 一揃 金拾五錢 郵税四錢

此『實用輕便雜誌挿み』は雜誌を毎號取揃え保存なしおかんと思はるゝ讀者諸君の御需めに應じ調製したものでリンネル總クロース製意匠入て二ヶ所を金具附の紐て綴り毎月雜誌の來るたびに幾冊でも順々に綴ぢて行く事が出來、且つポール二十四オンスの表紙を用ひましたから本を損せず美麗に保存する事が出來る一寸氣のきいたものです。

猶此『實用輕便雜誌挿み』は英語研究や初步英語のみに限らず其他の雜誌類にも適用する事が出來ます。

發行所 東京市麹町区十ノ六 富士見町 英語研究社 振替口座 東京一八二三六番

高野一助先生譯

スウヴェストル氏原著 市隱日錄

總クロース金字入製禎美 正價金六十錢 郵税金六錢

本書は健全なる好讀物として歐洲は元より我邦歐文學者間にも廣く愛讀せられたる佛國文豪スウヴェストル氏の傑作「巴里屋根裏の哲人」の完譯にして一書記の日記に録れる簡朴なる物語のうちに處世の大道を指示せるもの警句あり教訓あり行るに趣味津々たる文を以てす。佛國翰林院が賞を著者の未亡人に授けて本書の世道人心に及ぼせる功績を旌表せるものまた以て本書の價値を見るべし。讀書によりて健全なる品性を養はんとするの士及び子弟の爲めに慮るの父兄はまづ一本を其文庫に藏めざる可らず。

本多孝一先生著（好評第四版）

會話作文應用自在 英文暗記法

總クロース製裝禎美 正價金二十五錢 郵税金貳錢

英語研究の基礎は英文を暗記するにある、之を忘れば會話や作文は勿論譯讀などをする場合にも無用の勞力を費すこと少くない、然しこの暗記なるものが文中々容易なものでない、即本書は此必要にして而かも容易でないを最も行ひ易くして最も功果多き方法を佛人クヮン氏の教授法より思ひ付きたる物、讀者若し此方法に依らば普通に要する勞力の數十分一を以て確に暗記の効を收め從つて會話に作文に譯讀に應用自在なるを得るに至るは固く保證する所である。

發行所 東京市麹町区十ノ六 富士見町 英語研究社

地方讀書家諸君に告ぐ

本社は地方讀書家諸君の便利を計り東京市内發行の書籍雜誌に限り郵税を要せず定價金額丈御送付相成候へば迅速叮嚀に取次の御需めに應じ可申候

一御注文書狀には書名、發行所、代價等は階書にて明瞭に御認め被下度候

一御注文書狀到着三日間内に發送、返信等の處理を爲し且つ五十錢以上の書籍には發送すると同時に發送通知書を發し可申候

一返信を要する御書面には返信料御添付被下度さなくば廻答不仕候

東京市麹町區富士見町六丁目
振替口座東京一八二三六番

英語研究社

新刊豫告

萬朝報英文記者 今井信之先生著

和文英譯獨習書 十一月發行

萬朝報英文記者 今井信之先生著

英作文練習カード 十月發行

新案登錄應用（ルードズリーフ式）

新式 **學生筆記帳** 近刊

新案登錄應用

學生用カードブック 近刊

發行所 東京市麹町區富士見町六丁目 英語研究社

新式英語通信教授

新學期開始

新式獨習

英語講義錄

英語獨習の門戸は開かれたり

此好機を失ふ勿れ

勉學の好季は來れり、諸君は先づ第一に英語を學ばざる可からず、

凡てが世界的となれる今日、猶未だ世界の通用語たる英語を學ばざるものあるか？

そは既に時勢に一歩を遲れたるものなり、遲れたりと自覺せる諸君は速に本會に來れ、

本會は「安價」の方法と最廉の會費とを以て必ず諸君を滿足せしめん、

詳細見本附會則申込次第進呈す

●本月中入會者には入會金免除の特典あり

初等、中等、高等各學科六ヶ月卒業
毎月英語雜誌無代配布
會費一ヶ月僅に金卅錢

東京市麴町區富士見町六丁目（振替東京三〇八五番）

大日本國民英語學會

發行所 東京 英語研究社